

山浦清麿

吉川英治

青空文庫

小諸の兄弟

一

『のぶ。——刀かた箆なだんす筒すを見てくれい』

袴はかまの紐ひもを締め終つて、懷紙わいし、印籠いんろうなどを身に着けながら、柘植つげ嘉兵衛かへえは、次の間へ立つ妻うしろの背へ云つた。

『——下の抽斗ひきだしじや。この正月、山浦やまうら真雄まねおが鍛うち上げて来た一腰があるじやろう。二

尺六寸ほどの物で、新しい木綿もめんに巻まき、まだ白鞆しらさやの儘ままで』

『ございました。この刀ではございませんか』

『それぞれ』

と、嘉兵衛は手に持つと、座敷の中ほどに、悠ゆつたり坐り直した。

今朝——

この信州松代まつしろの城下、長国寺の境内で、藩のお抱え鍛冶かじ、莊司直胤しょうじなおたねが主催で、大がかりな刀の「試し」がある。

それはもう、明け方あけがたから始まっている筈とあつて、気短きみじかな嘉兵衛は、
(はやくせい。はやくはやく)

と、食事せも急せぎ立てるので、彼の妻は、良人おっとを送り出すのに、うろろうして急いだ程だった。

で、もう玄関には、草履ぞうりを揃そろえて、供の仲間ちゅうげんも先刻さつきから待っているというのに、嘉兵衛は、白鞆しらたもとの一腰を払うと、

『のぶ、打粉うちこを出せ』

と落着き直して、悠々と又、刀の拭ぬぐいを始めた。

ゆうべも、独りで取出して夜更よふけまで、眺め入ながっていた刀である。

よほど、気に入っているらしかった。

『うむ。……いいところがある。直胤うちものの鍛刀うごなどよりは、無名のこの作者のほうが、遙はる

かに、魂つぶやがはいつておる』
呟つぶやいて、木綿袋へ巻き直し、

『では、行つて来るぞ』

と、膝ひざを起てかけた時である。

折も折、客とみえて、玄関に控えていた仲間が、そこから告げた。

『御新造ごしんぞさま。山浦の御舎弟がお見えでござりますが』

声を聞いて、嘉兵衛が直じかに、奥で云つた。

『なに、真雄まねおの弟が見えた。……むむ、大石村へ養子に行つたとか聞いていたが、あの環たまきと申す次男であろう。いい所へ来た。ちよつと上げろ』

二

山浦環は、又の名を内蔵くらすけ助とも称つた。まだ二十歳はたちぐらいで、固く畏かしこまって坐つた。黒い眸ひとみには、どこかに稚氣ちいきと羞恥はにかみを持つていた。

藩士ではない。小諸こもろに近い山里の郷土の子である。だから城下へ出て来る時など、殊に身を質素しつそにしていた。粗末な木綿の着物に木綿の袴はかま——どこと云つて派手はで気のない田舎いなかびた青年だつた。けれど、それで居て、肩の薄い肉づきだの、整ととのつた目鼻だちだの、天性の

端麗が、どこやらに潜んでいた。

『……そうか、御年貢の事で、お蔵役所まで参ったのか。よく寄ってくれた』

『序と申しては、恐れ入りますが、以来、御無沙汰いたしております。常々兄の真雄が又、
一方ならぬ御庇護に預かっております由で』

『いや、そちの兄も、ぐんぐん腕が上つて来てな。後援としておるわしも、世話効があるというものよ。——時に、そちはもう、近頃では、刀も鍛つまいな』

『はい、養家先では、刀を鍛つなどという暇はおろか、刀を観るまもございません。庄屋の雑務やら養蚕やらで』

『百姓もいい。そちのような者が、庄屋の跡目を継いで励めば、あの辺の村々もずんと好くなるに違いない』

環は、ふと、淋しげな顔をして、

『近頃も、兄は相変らず、お宅様へは何つておりますか』

『ム。稀に見えるが、今年はまだ、正月に鍛ち上げた此の刀を持って見えたきりじや』

『お。それは、兄の鍛えでございますか』

『見るがよい、懐しかろう』

『はい』——と、手を差し伸べかけたが、

『いや、止しましょう。刀を見ると、又、鍛冶小屋が恋しくなつて、兄のように、自分も鎚つちを持ちたくありません』

『そちも、刀鍛冶が、好きとみえるな』

『兄は、上田の御城下に住む、河村寿隆かわむらかずたかの門に習まなび——私はその兄から、十三四歳の頃より、鎚つちの打ち方、重ね鉄かねの仕方、土取り、火入れまで教わりました』

『では今迄には、兄弟して、鍛つた刀も多かろうな』

『いつも、兄が本鎚ほんづちに坐り、私が、対むかう鎚づちを把とつて、夜の白むのも知らず、鍛ち明かしたもので御座いました。……けれど、他家へ養子に参つてからは兄に会あうのも、年に一度か二度。鎚の音さえ、此の頃はとんと、耳から忘れた気がいたしまする』

出前でさきらしい容か子こに氣きづいて、環たまごは、急に長座を詫たずさび、携たずえて来た土産物みやげものの山繭まゆ織おり一反と、山芋つとの苞つととを、奥へ渡して、

『又、伺まいまする』

と、辞ありかけた。

主あるじの柘植嘉兵衛しらかやは、袋卷ひつせの白鞆しらさやを提ひげて、一緒に立ち上りながら、

『帰るのか。——ではその辺まで、同道しよう』
と、一緒に門の外へ出た。

三

家毎の杏あんずの花から、淡うすい朝霧が立ちのぼっている。

川中島の洲すを繞めぐる疎林や、丘の草にも、仄ほかな緑が萌もえ出して、信濃の春は、雪解ゆきげを流す千曲川ちくまの早瀬のように、いつさんに訪れて来た。

兄の鍛った刀を持って、嘉兵衛が家を出て来たので、山浦環は、

『きようは、どちらへお越しでござりますか』——と、其刀それが氣きに懸かかるように、訊ねた。
『知らぬのか』

と、嘉兵衛は、長国寺の境内に今朝ある「試刀ためし」の催しを話して、

『誰が云い出したか、お抱かかえ鍛冶の莊司箕兵衛直胤の鍛うつ刀は、折れ易いといううわさが専ら立ったものじゃ。で、直胤やその弟子共が、怪しからぬ中傷いと怒いかって、自分たちの鍛つ刀が、噂の如く折れる物か、折れない物か、衆人の前で試してごらんに入れる。折れる

折れるといわれる刀は、おおかた、近郷きんごうの名も無い雑鍛冶こしらものの拵え刀に違いない。左様ないかさま刀ものと混同されては心外である。禄ろくを頂戴しておる藩公に対しても、闡明せんめいにする義務がある。——などとひどく力んでな、大懸かりな試刀ためしをいたすというので、これから出向いてみるのじやよ』

と、説明した。

環は、聞くと、更に眼をみはつて、

『では、お持ちになった兄の刀も、そこで試すおつもりですか』

『うむ。直胤の弟子共は、天下に直胤ほどな名人はないように云い居るでな。——無名の、しかも、刀鍛冶とも名乗らぬ、素人の中にも、かくの如き、隠れた上手がある事を、見せてやろうと思うのじや』

『では先刻さつき、見よと仰つしやつた時、私も、見て置けばようございましたな』

『なに、この、真雄の刀か』

『はい』

『そんな心配はいらぬ、見事なものだ。——いつぞやも、わしはこれを自慢に持って、寺社奉行の山寺源太夫様のところへ行き、お見せしたところ、殊のほか、お褒ほめに預かった。

そこで、ぜひ源太夫様にも、一腰、真雄へお吩咐いいつけ下さるようにとお願いしておいたところ、快く御承諾で、其後、大小一揃い、真雄方へ、御註文があつたという知らせで、わしも面目めんぼくを施し、真雄に取つても、愈々《いよいよ》、世に出る時が来たと、欣んでおるところじやよ』

と、嘉兵衛はまるで、わが事のように、嬉しそうな顔なのだ。その顔つき通り、真雄の鍛ものつた刀といえ、信仰的な自信を持つて、斬れる、折れない、曲がらぬと、彼は、人も広言して憚はばからなかつた。それほど熱心な後援者であつた。

四

——だが、嘉兵衛は、貧しい侍である。金や顔を以て、後援はできなかつた。ただ努めて、真雄の人物と作刀を、重臣たちの間へ推賞したり又、真雄自身へは倦まざる精進を、鞭撻べんたつして来ただけだつた。

ところが。

松代藩では、それより数年前に、家老の矢沢監物けんもつの周旋で、初代水心子正秀すいしんしの直じきも

門、莊司箕兵衛直胤を、かなり高禄で、しょうへい 招聘していた。

人情は、当然、双方を、比較する。

(何どつ方ちがよいとも云えんなあ)

と、いう評が、密かにあつた。

(いや、むしろ真雄のほうが、出来はむらだが、良い刀ものがあるぞ)

そんな観み方かたをする者もあつた。

そこへ、近頃、

(直胤の刀が折れた。——どうも直胤の刀は、折れ易い)

と、いう噂がぱつと立つた。

事実、川中島の辺で、若侍同志の喧嘩があつた時、一方の持っていた直胤の刀が、折れた事件もあつたのである。

又、家中の北きた沢さわ某なにがしも又、

(自分も、試してみたが、やはり折れた——)

と、云つたとか、云わないとかで、揉もめ事があつたりして、直胤一門は、とにかく、噂に対して、激怒していた。

そこで、公開して見せるとなった、今朝の長国寺の「試し」である。折れるか、折れないか、自分等の作刀を試す会だとは称しているが、その目標が、無名鍛冶の山浦真雄にあることはいう迄もない。——途々、嘉兵衛の口から、そんな事情を聞かされると、環は、

（これは、兄の名誉ばかりではないが）

と、遽に心配になった。

元々、兄は刀鍛冶ではないのだ。山家の一郷土に過ぎない。性来、刀を鍛つのが好きで、人に頼まれるまま鍛つて来たが、まだその道の専門家とは決していえる腕ではない。

その兄の鍛刀と——一世に名匠の聞えの高い水心子正秀の高弟直胤の刀と——何うして較べ物になろう。

（大丈夫）

と、嘉兵衛は思いこんでいるが、環は内心、案じずにいられなかった。少年の頃、兄の対う鎚を打つたことのある環には、兄の腕が、たとえ其後、上達しているにせよ、どの程度か、分っていた。

『嘉兵衛様、その「試し」の場所へ、私もひとつ、お連れ下さるわけには、行かないでし

ようか』

『なに、其方も来る？ よかろうとも。家中に限るといふ規則はない。直胤一門の方では、むしろ一人でも大勢に見てもらいたがっている程だからな』

『では、他ながら、お供として』

『何を憚ることがある。山浦真雄の弟として、威張って来い、大手を振って従って来い』

両作・川中島

一

長国寺の広い境内は人で埋っていた。

然し皆、武士ばかりだし——厳かな刀試しなので、自然、見る者も立会い人も、静肃せいしゆだった。

据斬、試し物目録

一 陣笠じんがさ、厚味三分七厘。お武具方御不用物。

一 四分一鍔つば、厚サ一分二リン透すかシ彫ぼり

一 俵たわら菰こも二枚たばね。五寸廻シ青竹入

一 鹿の角つのみつまた三股

一 鉄砂入り混粘こねば張り陣笠。

一 古革銅ふるかわどう、倉田猪之助所持。先祖大坂陣ノ節おり、着用ノ品。

一 兜かぶと。柘植嘉兵衛所持。重量めかた七百五拾匁。八幡座鉄厚はちまんざかねあつミ一分余。古作、鍛工宜シ。

こう、墨黒々と書いた貼紙の立て板が、どこからも眼につく幕の前に建てられてあつた。

——見ると今。

選ばれた斬り人きりての一名が、業物わざものをふり被かぶつて、土壇の上の干藁ほとわらを斬っていた。

『この通り!』

藁十本ばかり残つて、見事に斬れた。

斬り人は、使つた刀を翳かざして、

『直胤ただなの作。刃こぼれ、曲がりなし』

と呶鳴どなつて、立会い人の方へ渡して、引き退がつた。

陣笠、鹿角、古兜。

と次々に、べつな刀を持つて出て、べつな斬り人が試みた。

皆、直胤の刀だった。

そして、かなりな斬れ味を見せ、二太刀ふたたち、三太刀でも斬れなかった刀でも、折れはしなかった。

直胤の悪評は、訂正された。

まだ、鉄てつ杖じょうを斬るとか、鎧よろいの鉄銅かねどうを斬るとか、だいぶ項目が残っていたが、

『そう時刻があるまい。この辺で、ちと他の刀を試しては』

と、立会い人から、当日の主唱者であり、また今まで試された力の作者——箕兵衛直胤へ、相談があった。

直胤は五十四、五歳の老人だった。勿論、熱心に眼を光らせて、床しょうぎ几ぎに掛けて見ていた。

『いかがで御座ろう。——もうこれくらい試せば、もはや、あらぬ世評が、貴公を中傷する為の嘘うそであったという事は、誰も承認したであろうと存じますが』

立会い人が、そう云うと、直胤は、磊落らいらくそうに笑顔をくずして、

『いや、御苦労でござった。わしは最初から、何も大して気には懸けておらんがの。……弟子共さえ、承知なら』

『では、近頃、頻りと名の聞える、山浦真雄の作りを、四、五本ここで試しますが、御異存はございますまいな』

『まあ、余り角目立たんがよいが』

『いや、持参して、望む者もございますから』

『望まれれば、試合を挑まれたも同じこと。嫌ともいわれまい。——何事も、お世話人と、弟子共に、おまかせいたすで』

『然らば』

と、立会い人が、席へ退がると、斬り人は又、名を呼ばれて立った。

二

『山浦真雄の作!』

一刀を払って、斬り人が、こう刀を衆に示して、据物に向うと、観衆も斬り人の呼息

と一つになつて、しいつとなつた。

『……………』

わけても、環は総身を固くして、斬り人の手元を睨んでいた。

呼吸もせず。——手にも、われとなく、汗をにぎつて、

——ええいッ！

と云う声を、耳というよりは、彼は、心臓を突き貫かれたように聞いた。

据物の鹿角から——どすっ——と鈍い音が勿ね返つた。斬り人は、二太刀目を下ろした。

そして三太刀目。

『曲がつたッ』

と、さけんで、身を退いた。

環の側にいた柘植嘉兵衛は、ぐらぐらとしたように、前へ出て行つた。

『あ。暫く』

『なんじゃ』

『失礼ながら、今の試しは、斬り人の手元に、少し御無理があつたように見受けられた。

——この一刀で、もう一応、お試しがありがたい』

『心得た』

と、嘉兵衛が携えて来た一刀を受け取つて、斬り人は、前のようにそれを観衆の眼からずつと直胤一門の控えている方に迄、手元を徐々にまわして見せた。

『ムム。見た眼には、相のいい刀だ』

直胤の弟子が、呟いた。

冷悔の色が、その辺りで漂つた。

だが、直胤は、その刀へ床几から礼儀をして、

『大事に』

と、注意した。

白鞘なので、斬り人は、仮鍔を入れ、白布で柄巻して、揮り被つた。慎重な構えと、澄み切った氣息の合致したせつな、ヤツと満身から喚いて、壇の上の鍔を斬つた。

鍔は七分まで斬れた。然し、びんと異様な音が、誰の耳にも触つた。

斬り人は刃を挙げて、

『鉏から一尺上、刃こぼれ有り——。硬い』

云いながら、無造作に、立会い役の手へ渡した。

嘉兵衛は、蒼白になつてしまつた。怪我をした我が児でも見まもるように、手から手へ、渡されて、冷悔の眼もてあそばに弄れてゆく愛刀の方を眺めた儘、茫然としていたが、突然側にいた環が、何かさけんで、ぼつと人々の環視の中へ駆け出して行つたので、

『あッ。——オオ』

止めるとも、励ますとも、何ツ方つかずな声をあげて、自失の我から、愕おどろきの我に回かえつた。

三

『公平でないっ。今日の刀試しには、公然と、奸策かんざくが行われていると存じます！』

山浦環は、こう周囲へ向つて、訴えていた。

静かだつた空気は、彼の凄まじい声も打消すほど、途端に、喧騒けんそうの坩堝るつぽに落ちていた。

今、斬り人の手から、立会い役の手へ渡された、兄真雄の作——柘植嘉兵衛が持参の一刀を——無下に環が奪ろうとしたからである。

『何をするっ』

『場所がらも弁えず』

『不正があるとは、何を吐ざくか』

蔽い被さつて、環を阻めた直胤の弟子や、斬り人の侍たちは、その襟がみや、両腕を把るなり、

『この青二才めが！』

引戻して、試し場の中ほどへ、蹴仆した。

踏まれても、蹴られても、環はすぐ、刎ね起きた。そして、

『卑劣があると観たつ。不正があるつ。行り直せつ』

と、叫んで歇まなかつた。

直胤の弟子たちは、

『掴み出せつ』

と、息まいたが、その時、環の叫びへ、木魂して答えるように、観衆の中からも、

『そうだ、不正が見えたぞ。行り直せつ』

という声が、所々に起つた。

それを又、打消すべく、

『だまれつ、喧ましい』

『刀は、正直だ』

云い返す者があると、更に、それを圧伏して、

『行り直しつ。行り直しつ！』

と、宣言するように、云つて歇まない見物もあつた。

俄然、平常、直胤の一派を支持している者と、ひそかに、それへ反感を抱いている者との感情が、環の一投石に依つて、露骨な波瀾をよび起したのであつた。

そのうちに誰からともなく、

『あれは、山浦の舎弟だ』

と云う声が伝わつたので、直胤一門は、

『何、真雄の弟だと？』

と、眼をみはり直して、愈、事態は険悪な対立の相を呈した。

四

今の環は灼熱した鋼であつた。

誰の言葉も、その赤い耳は刎ね返して、

『行き直さぬうちは』

と一步も退かなかつた。

『云い条は、それか』

と、中へ這入つた世話人たちが云つた。

『それだけです！』

純情な眸を光らして、環は猶、繰返した。

土気色な面をして、先刻から見ていた箕兵衛直胤は、

『お世話役、望みにまかせてやらつしやい』

と、床几から云つた。そして、

『今の刀を、その若者に持たせ、同じ鍔を、斬らせてみるがよう御座ろう』
と追け加えた。

世話人たちは、環へ詰め寄つて、

『見事、斬るか』

と、ただ糺した。

『斬る』

環は、昂然と、唇を嚙んで答え、

『いぎ！』

と、自分を叱咤するように、即座に、袴をくくり上げ、下緒を解いて、袖を片襷にからげた。

——だが、先に鏢を斬った真雄の一刀を受けてみると、故意に斬り人が無理をした痕が歴然とその刃こぼれに読める。たとえ、何んな伝世の銘刀でも、邪心をもって、折ろう曲げようとすれば、傷つかぬということはない。

刀は名鏡である、人は、止水の相でそれに溶け合わなければならない。一点の曇り、一点の揺るぎでも、心が動じれば、刀も狂う。

環は、まず怒りを鎮めた。

そしてただ、

『八幡』

と、念じて壇上の鏢へ、発矢と刀を入れた。

鏢は真二つに斬れた。

しかも刀は、元の儘だった。

『——ア。斬れた』

と、人々の間から流れた感嘆の声を聞くと、環の眦まなじりは、たらたらと、湯のような涙を垂らして、一筋の歡喜かんきを、頬へ描いた。

多感なりし年少の日

一

兄の名は、雪そそがれた。——これでいい！

環は、刀を返して、すぐ身を退ひきかけた。

すると箕兵衛直胤が、

『待たつしやい』

と、声をかけた。

『何ですか』

『おぬしは、山浦真雄の弟じやそうなの』

『そうです。それが何うかしましたか』

『いや、賞めてあげるのだ。そう恐い眼でわしを睨むことはない。兄思いな情は、見上げたもの』

『未熟ではあるが、兄の刀も、そう鈍作でないことは、お認めになったろうな』

『いや、分らぬ』

箕兵衛直胤は、首を振った。

『——一振ぐらい試したとて、そう易々、折紙は付けられん。過ちの功名ということもあるからの。今、見事に斬れたのは、おぬしの一念が斬ったので、刀が斬れたのではあるまい』

『ば、ばかな』

『今朝から、わしの作は、十幾振も試しておるのじや、それと互角には申されまいが、口』

惜しくば、猶、二刀三刀、数を重ねて、試してみよ』

『おお、幾らでも』

『門人——真雄の刀を取り寄せて、次の据物を斬らせてやらっしやい』

『それには及ばぬ』

環は、自分の腰に横たえている刀の柄を打って、

『兄の作は、ここにもある』

『ムム、自身の差料か。猶よかろう。——して、据物には、何を置くか』

『何なりとも』

『よし』

直胤は、古兜の鉢金を、壇に据えさせた。

そして自身、起つて来て云った。

『あの目録にも見える通り、わしの作でも、此品ではないが、他の鉢金を斬っておる、おぬし、口ほどならば、これが斬れぬことはあるまいが』

『……………』

何の！ と環はそれを見つめた。

『どうじゃ、行るか』

『致します』

『然らば——』と、直胤は身を退いて、『拝見しよう。やらっしやれ』と云い放った。

二

環は再び、身構えを取った。

身ではない、心である。

こういう感情の中で、すぐ心を無念無想に取り戻すことは、難かしいことだった。

けれど直胤が、わざと若い彼の心を怒らせるような事を云ったのも、一つの術策である。環はそれと察したので、努めて、微笑をもつて、心を素さなかつた。

(これしきの物が斬れないで何うしよう)

環は、自分の差料へ手をかけながら、強い、信念をふるい起した。

身に帯びているこの刀こそ、自分が十六、七歳の頃、赤岩明神に祈誓をかけ、兄は本鎧

の座にすわり、自分は相鎚あいづちに對むかつて、夜となく昼となく、兄弟ふたりの魂を火として、打ち鍛えた刀なのだ。

兄と自分との合作である。

しかも、この焼刃やきばの中には、母の真まじこ心さえこもつて居た。兄弟ふたりが、一心不乱になつて居ると、母は絶えず、仕事場へ宥いたわりに来て、

（オオ、精が出るのう。兄弟ふたりの合す鎚音は、御先祖様の御座らつしやる土の下まで響いて行こうぞ。今でこそ、赤岩村の佗わびしい郷土、鍬くわを片手に、飼蠶かいこと共に起おき臥ふししている土侍じゃが、お許もとたちの御先祖様はといえ、足利あしかがの世の頃まで、今も昔のままに居るこの辺り一帯を砦とりでとして、南朝方へお味方した山浦常陸介ひたちのすけというた名だたる勤王の名将じゃぞ。——刀を打つなら、御先祖様のような、お心になつて打て。——鍛冶屋職人になる程なら、鍬くわを持つて、土を耕した方が、どれほどましか知れぬぞ。——侍のたましいを打つ身は、侍以上のたましいでなくてはなるまいが）

と、骨休めにと、茶を入れて、宥いたわり慰めてくれる間も、母はそうした訓誡くんがいを、兄弟ふたりに對して、忘れなかつた。

その後。

故あつて、自分のみは、刀鍛冶を断念して、大石村の郷土庄屋長岡家へ、養子に行つてしまったものの——今も、母の訓えは、心にある、兄の鎚音は、耳にある。

そして、自分の当時の一心と。

こう三つのものの結晶が、この刀ではあるまいか。

(どんな物でも、斬れぬはずはない！)

彼の信念はそのまま、不動の体になつて、刀は、静かに頭上へあがつた。

——そして、ぐつと、下腹に、宇宙の気を呑むように力がいいる。

その丹田の力が、満身の氣となつて、ええいツと、一声の下に肱が下ろされようとし

た間髪——

『あつ、待つた！』

と、箕兵衛直胤が、ふいに、声をかけて、彼の切先の前へ迫つた。

——はつと思わず気を弛めると、直胤は、据物の古兜へ手をかけて、少しその位置を直した上、

『かんじんな的が少し曲がつているげな。さ、改めたぞ。やらっしやい』

と、身を退いて、又、じいつと環の手元を見つめていた。

(要らざる介錯)

と、思いながら、環は、刀を持ち直して、一気に、兜の上へ斬りつけた。

ばん！ と異様な音響がして、何事ぞ、刀は二ツに折れて飛んだ。

利鎌とがまのような刀の欠けは、宙へ上つて、ぶんと、観衆の中へ落ちた。

——どつと、その人々がうごく。

同時に、直胤の弟子、そのほか、かかる事あれかしと密かに祈っていた連中は、手を打つて、わつと嗤わらつた。

『……し、しまった！』

鏢つばからわずか一尺ほどしか残っていない半身の刀をみつめたまま、環は、茫然——われも無くなつてしまった。

動くことすら、忘れていた。いつ迄も、折れた刃やいばを、その儘、身を硬こわばらせて、髪をそけ立てていた。

唇は、見るまに、色を失つた。慚愧ざんきの眼からは、とめどなく、ぼろぼろと涙がつたわつてくる。——周囲の嘲罵ちやうばも、侮蔑の眼も、頭しびが痺れて、聞えなかった。

『——環つ、環つ、退がれつ。……もうよい、引き退がれ』

誰か頻りと、自分の腕を組んで、引つ張る者があつた。

彼の脚は、墓石みたいに、動こうともしなかつたが、ふと、その人の顔を見ると、柘植嘉兵衛であつたので、はつと弛むと、

『これッ——見苦しいッ』

嘉兵衛は、共に泣きながら、酔いどれでも引つ摺むように、無理無態に人混みから山門の方へ、彼を拉して行つた。

三

『す、すみません！……。嘉兵衛様』

山門の下まで来ると、環は、声をあげて泣き出した。

嘉兵衛も、肱を曲げて、顔を蔽いながら、

『な、なにを泣く。泣くことがあるものか。お前たちはまだ若い。いくらでも……いくらでもまだ……将来はあるんだ』

『屹度！……屹度！……今にあなたのお顔は立てます』

『ケチなつ。馬鹿つ』

嘉兵衛は、嗚咽しながら、怒った。

『わしの面目など、何うだつていい。口惜しいのは、もつと大きな事だ。兄に会つたら明らかに、きょうの仔細を伝えておけよ。……よ！ よ！ ……穿き違えて、遺恨を含んじやならぬぞよ。自分を励ます鞭として、一層、精進してくれとな……。そう伝えるのだぞよ』

『わかりました。……わ、わかりました。じゃあ、柘植様、又何日か、お目にかかります』
いい捨てる、顔も見ず、嘉兵衛の手を振り切つて、環は一散に馳け去つた。

真昼の道も、真つ暗だった。環は、恥に打たれて、陽も見られなかった。往來の人に、顔も見られるのも嫌だった。

『おおい。おおい……待てようつ』

誰か、後から追いかけて来る者がある。編笠を被つて、干飯袋に旅の持物を入れ、短い義経袴の袴腰にくくり付けている若者だった。

町の辻で、若者は環に追いついた。

後から肩を掴んで、

『待てと云つたら。——つんぽ聾か、貴様は』

『何!』

気が立っているので、環も、きらつと眼を研いで振向くと、編笠の中の顔は、自分よりもつと若い——まだやつと十七、八歳かと思われる少年武士なのであった。

が——年上の環よりは、どこか沈着で、大人びている口くちぶり吻であり、態度も鷹揚おうように、

『何を怒おこるのか。わしは貴様に好意を持って、わざわざ追いかけて来た者だぞ』

『怒つたわけではないが、つい、気の紊みだれていた矢先なので』

『そんな事で何うする』と年下のくせに、少年はそう窘たしなめて、

『長国寺の刀試し——どんなものかと、わしも見ていたのだが——貴様はうまうまと、箕兵衛直胤の手に乗つたのだ』

『えつ、ど、どうして?』

『二度目だ。——あの時、貴様が最初に気合をこめた儘、やってしまえば、古ふるかぶと兜かぶとの鉢金ぐらい、きつと斬れていたに違いない。老ろうかい獪かいな相手方は、その鋭い気を抜くため、わざと待てと声をかけ、何の必要もないのに、兜の位置を少し直したりしたのだ』

『ああ、そうだったか』

『もいちど帰り給え。こんどは拙者が斬り人に立ってやる』

『いや、御好意は有難いが……止そう』

『見ていた他人の拙者でさえ腹が立つのに、残念ではないのか』

『もう、古兜など、斬りたいとも思いません。他日、もつと、もつと、大きな望みを斬り落してみせる。……だが、先刻の取乱した失礼は、おゆるし下さい。御好意は忘れずに置きます。貴方の御尊名は』

『拙者は、長州の藩士、金子重輔という者。この松代藩で有名な佐久間象山先生の名をお慕いして、遙々、江戸から廻り道して立ち寄ったが、生憎、象山先生は御不在、むなしく帰って来たところだ』

『わたくしは、赤岩村の郷士、山浦環。又どこかでお目にかかる折もございましょう』

『じゃあ、何うしても、もう試し場へは戻らんのか』

『はい。たとえ先に奸策があつたにせよ、不覚はどこまでも不覚です。これから行って、長国寺の大吊鐘を斬つたところで、まだまだ、きょうの自分の気持は拭われません』

『こんな山国の藩に、象山先生のような新知識が生れたのは、不思議と思つていたが、信濃にはいろいろ変り者が居るのだな。……それもよからう、では、おさらば』

と、金子重輔は、すたすた去ってしまった。

恋こいぎぬた
砧

一

父のない後は、長男が家の柱はしらだった。

母でも、老いての後は、家長の彼に、気がねをした。どんな事でも、彼が領うなずかなければ、決めなかった。

だから、半農半武士はんのうはんぶしの郷土に過ぎない、ここの小さな家族制度でも、一国たどに喩えれば、長男のことばは、主君のことばみたいであった。

足利以前から、この信濃の山間、小諸こもろぎ在の赤岩村に、十何代も続いて来ている旧家の
——たくま 逞しい梁はりや、黒光りな柱などと共に、——それは今でも巖げんとして、失われていない山

浦家の家風なのであった。

『真雄まねおや、ことしは、雪菜ゆきながよう漬つけかつたぞよ』

ひろい鍛冶土間の片隅に、六畳ほど休み場がある。

母のお菅すげは、茶盆をそこへ置いて、鞆ふいしに向つてゐる長男の真雄へ云つた。

『すこし休まぬかの。茶を入れて来ましたがな』

真雄は、刀の地鉄じがねにする、玉たまはがね鋼がねを熔かす仕事に、顔まで、炎ほのおにしているので、

『後で』

と、云つた儘、母の方も見なかつた。

お菅は、すこし耳が遠かつた。もう茶を注さして、

『今の、去年の漬込みを、一樽たる開けてみたところ、よい色に漬かつてゐるわの。じゃが、其方そなたが箸はしをつけぬうちは、誰にも、喰たべさす事ができぬによつて、一箸、喰べてみておくれ。——余りそう精をつめても、体の毒であるに』

体——母にそういわれると、真雄は、自分だけの体とは思えなかつた。

『や、すみませんな。では、戴かきましよう』

手桶ておけの水で、ぎつと、手を洗つて、休み部屋へ、腰かけた。

『今、かかっている仕事は、誰方様のお刀じやの』

『松代藩のお寺社奉行、山寺源太夫様の御注文でござります。他ほかならぬ柘植様のお口添えで、素人鍛冶のわたくしなどには、身に過ぎた御下命と、冥みよ加がに存じて、玉鋼から、吟味に吟味を致しておるのです』

『まあ、そうかの』

と、母は欣うれしそうに、齒の抜けた口に、雪菜の一茎くきを入れて、もぐもぐ唇くちをうごかしていたが、真雄の顔つきの好いのを見て、そつと云い出した。

『又かと、うるさく思わつしやろが、弟の環たまきのう、もう、養子先の家を出てしもうた事じやに。……何とか、忪こらえて、もいちど家へ入れて下さらぬか。そなたも慥しつ乎かした相鎚あいきの打ち人てがないと、常々、云い暮している折ではあるし……。真雄よ何どうじやな？』

二

長国寺の噂うわさは、松代から、四、五里しかない赤岩村へは、すぐ聞えてきた。

それから間もなく、環たまきが、養子先の長岡家から、飛出してしまったという噂うわさが、大石村

から、近郷きんきょうに伝わった。

(よもや?)

と、兄の真雄も、母のお菅も、強しいて心で打ち消していると、環は、或る夜そつと、裏口から生れた家へ帰つて来た。

そして、裏の納屋なやで、長いこと母と密ひそひそ々々話した揚句あげく、彼の母は涙ながら、真雄の所へ来て、その氣持を訴えたが、

(家へ入れるわけには行きますまい)

と、真雄は、養子先へ義理を立てて、肯きかなかつた。

元々、環と、養子先の娘とは、尋じんじょう常な縁組ではなく、若い彼と彼女との、恋の始末を、強しいてそこに正式化せいしきかして落着けたものであつた。

それまでにするには、仲へ入つた人々にも、娘の親、親類にも、悲嘆や苦勞を随分とかけさせている。曲げられない旧弊きゅうへいの家憲や、困難な事情も、どちらも可愛い一人娘と、息子の為にと、曲げさせた上、やつと纏まとつた両家の縁組なのだつた。

それはまだいいとしても――。

環が、家出したなら、では生家さとへ入れようとは、何うしても真雄として云えない理由が、

もひとつある。

環の妻には、もうこの春、生れたばかりの子があるのである。

その子を捨て——又、飽きも飽かれもせぬ恋妻を捨てて——何で環は養子先を飛び出してしまったか。

弟のその気持を考えると、真雄としては、涙があふれてくる。掌をあわせて、兄思いな、その情熱へ、伏し拝みたい。

『……おつ母さん、折角ですが、何度仰つしやっても、環を家へ入れるなどという事は、許されるものではありません。もう、云わないでください』

真雄は、わざと、膠なく云った。

そして、辛いその胸を、鎚と鞆へ打ち込んでしまおうとするもののように、休み部屋から、腰を上げると、

『あ。お待ち……待つておくれ』

彼の仕事着をつかんで、彼の母は、嘗つて一度も、子に見せた事のない程な、悲しい声を顫わせて縫った。

『でも、真雄や。……彼れの胸も察してやったがよい。環は、吾儘や自分の移り気で、

養家を出たものではありませんぞ』

『何であろうともです。——あれ程、御苦労をかけた媒人方なこうどがたや、先の長岡家に対してだつて、今更』

『それは、この母が、長岡家の門前へ行つて、土下座しても詫びましょう。彼あの子の、氣持を聞けば……わしの命は縮めても、望みのように、家へ入れてやりたいと思うのじゃ』

『ば、ばかな事を、仰かつしやいませ。おつ母さん、そのように甘いからいけないのです。何で叱りつけて、追い返して下さらないのですか』

『どうして、追い返せよう。——飽きも飽かれもせぬ妻を捨て、生れたばかりの嬰兒ややも残して、此家ここへ戻りたいという環わんの心を、そなたは何うして酌くんでやらぬのじゃ』

『……馬鹿です、彼弟あいつは』

『な、なにをいうのじゃ』と、お菅は、懐ふところ中の乳呑ちのみでも庇かばうように、又、母性の聖しやう嚴ごんを、髪かみの毛けに逆だてて、叱咤しつたするかのようになつて、

『それへ、坐りなされ！……真雄まをつ、坐りなされつ』

『なんですか』

『何なにといやつた。——そなたは、弟あの罰あが中あたるとは、思おもひませぬか』

『思いませぬ』

母が、本能の愛に、乱れれば乱れるほど、真雄は冷静になって、鍛冶土間の大地へ畏まつたまま、冷ややかな面でそう答えた。

三

『ようまあ。兄の身が、そのような無慈悲な言葉を』

お菅は、声を励ましたが、子の冷然として、強い顔を見ると、すぐ気も挫けて、むしろその不機嫌を取做し加減に、

『そなたに、環の心が、解けぬ筈はないじやろが、よう聞いて賜も、……環はな、もいちど、兄の片腕になつて、其方を松代の直胤にも勝る刀工にしてみせると云うのじやぞ。……御先祖山浦常陸介様以来の家名を、踏みにじられて、それを雪がいで措こうかと、健気にも、念じているのじや』

『おつ母さん』

『なんじや』

『あなたは、環を、何処どこの子だと思っどっているんですか』

『此身このみが生んだ子。何をいうのじゃ』

『さ。——それが大きな間違まちがいです。環はすでに、山浦家の子ではありません。長岡家へくれた養子です。長岡の家の恥辱ちじよくなら、そうして、雪ぐもよいでしょう。——だが、山浦家には、不肖ふしょうながら、真雄という者が居ゐります』

『才、それは道理の。……じゃが真雄や、環とても、この儘、妻も子も、生涯捨すて切きるつもりではあるまい。何よりは、そなたに取とって、共に鎚つちを持ち、刀の鍛錬きわを究きめるに、よい相手がない。弟子もない。それを環は苦くるにしていやる。——今、早速に、其方が鍛くちにかかつている山寺源太夫様の御下命ごげんめいの品にせよ、ここで一ひと際ときわ、優すぐれた刀ものを鍛うち上げねば、名折れの上の名折れになろうと』

『よ、よけいなことだ』

『では、そなたは、長国寺でうけた恥ちかしめを、口惜くちおしいとも、家名の恥辱ちじよくとも、思おもわぬのか』

『こちらは、元より百姓郷士、農事の片手間に、鍛くっている仕事です。——先は、天下の刀匠水心子の高弟たうていとして、藩から高禄をいただいている本業の刀鍛冶たうがではございませせんか』

『猶なほのこと、そのような名だたる者が、卑劣な、刀試しを開いて、しかも大勢の前に、こちらの恥ちぢらを曝さらしなどする事が、黙もくつて、捨すて措おける事であらうか』

『知らぬ顔かほしていればよいのです。それを環わんごとき若輩わくぱい者が、要いらざる出洒でしやば張ばりをしたればこそ、恥ちの上うわ塗ぬりをしでかしたのだ』

『なんで、そのように、環わんを、憎にく憎にくくと取りなざるのじや』

『腹はらの立つのは、直胤ちきんの一門いっもんより、てまえに取とつては、むしろ出洒でしやば張ばり者の弟ていです。子供の時から、血ちの気きばかり多くて、困こり者ものだと思おもつていたが』

『そう云いわないで後ご生しょうじや、この母ははに免まじて、彼あの子こを家いへへ』

『いけません。てまえが、此家このやの主あるじでいる以上いじやうは、一足いっさくでも』

『入れることはならぬか』

『知しれたこつてす。折よれる刀やいば、曲まがる刀やいば、どんな鈍なまくら刀やいばを作つくろうと、わたしはわたしだ。いちど養子やしこに行いつた者ものを戻かへして、その弟ていの腕うでなど借かりたくはありませぬ』

『でも、養家やしやを出だぬ先まなら兎とに角かく、遺書かきあきまでして、出でて了しまうたもの』

『勝手にするがいい。……相談さうだんずくで、飛出としたなどと思おもわれては、猶更なほさら、世間よこへも、先へも義理ぎりがすみますまい』

『頼むつ……』お菅は遂に、がぼと、泣き伏して、畳たたみへついた掌てを合せた。

『真雄。そなたには、内密ないしよでいたが、彼れあが家出して、わしを訪ねて来た夜から、実は、裏の納屋の中へ隠して、そつと、飯をくれてあるのじゃ。……今更、どこへ追いやられようぞ、どうぞ量りようけん見して、この仕事場へ、入れてください』

四

『おつ母さん！……』

『……』

『そんな事、聞かないでも、真雄は知っております。——毎夜のように、家の近くを、うろうろと彷徨さまよっている嬰兒あかこの泣き声でも分っている。あれは、環が捨てて来た妻のお咲が、子を抱いて、見えない良人を、探しに歩いている声ですぞ。おつ母さん！』

『……おいのう』

『あなただつて、あの嬰兒あかこの声は、お聞きでしょう。新妻の瘦やせた姿もわかるでしょう。子を抱いて、捨てられた若い女房が、どんな思っていることか』

『……………』

お菅は、咽び泣いて、薄い体を、よよと畳に顫かせた。

『たとえ、この上、山浦真雄が、いかに人から唾をうけようが、弟を、入れる事はできません、断じて出来ない！ ……ああ、もう止そう、おつ母さん、お体に障ります、やめて下さい、やめて下さい』

真雄は、鞆の前へ馳け寄つて、どつかと、筵の上に坐ると、金火箸を把つて、真つ赤な溶鉄となつた玉鋼を、火土の中から引き出した。

そして、鉄敷のうえに、それを置くや否、小鎚を把つて唇を噛みしめ、一念に鍛ち初めた。

ばツ、ばツ、ばツ——と鎚の先から焰の屑が飛んだ。眼にもいつぱいに赤い涙がたまっている。涙はこぼれて、鋼を冷まし、冷めた鋼は又、火土の中へ投げ込まれて、彼の苦しい胸の喘ぎを吐くように、鞆の呼吸にかけられた。

——と、すぐその鞆の上の竹窓越しに、ちらと、人影が映した。
弟の環だった。

『兄貴、兄貴』

『あつ、環だな。——まだ居たのか。そこらにうろついていると、砥水とみずを浴びせるぞ。とツとと、大石村へ帰れ』

『もう、会わぬぞ』

『何なにツ』

『——おつ母さん、お達者で』

お菅は、駈かけ出して、

『環やあーつ』

さけんだが、彼の姿は、もう先祖以来の大おお櫓おけに囲まれた家の外へ走り出して、千曲川の上流に沿う断崖きりだしの道を——その故郷ふるさとの少年頃から駈かれた道を——奔流の流るる方へと、ただ驀まっしぐらに、顧みもせず、どんどん駈かけて行つてしまった。

五

春は去つたが——

又、やがて、彼女の彷徨さまよう夜の数も減へつたが——。

でも猶、折々に、時ほととぎす鳥の啼きぬく闇の夜など、山浦家の裏に、ぽかっと、白桔梗きぎょうの花のような、女の顔が、悲しそうに佇たたずんでいることがままあった。

環の妻のお咲さきだった。

乳呑み子の名は、梅作うめさくといった。

稀まれに又、その梅作のかなしげな泣き声が、千曲ちくまの水の咽むせびかとも聞えることがある。

そんな晩——

夜業よなべの鎚つちを投げ出して、真雄は、そつと闇へ抜けて行った。

そして、彼女が、やがて悄しおしお々と、家路の方へ帰るのを、見届けると、ほっと胸を撫なで、

『馬鹿め！ 血の気が多すぎる！』

やり場のない怒りを、彼は、星へ向つて罵ののつたりした。そうかと思うと又、

『——弟よつ。帰つて来いっ。ここは山家だ。こんな平和なところが何処にある。——世間にかまわず、帰つて来いっ。母が丈夫でいるうちに、帰つて来てくれ。ようつ、弟つ……』

争闘の世間へ、人中へ、とうとうと絶えまなく奔はしつてゆく千曲川の激流に声を託して、家の前の断崖きりぎしから、独りでこう、おろおろと、叫んでいる夜もあった。

秋になると——ぱったり、お咲のすがたも、児の泣き声も、しなくなつた。

『もしや、煩病わづらつているのじゃないか。ひよつとして、首でも縊くつて？』

と、そんな不吉まで、案じられて、或る夜、真雄はそつと、環の去つた養家の垣の外に潜ひそんでみた。

もう寝しずまつた夜更けであつたが、月の白い縁先に、お咲は、砧きぬたを打つていた。

打っている衣きぬは、嬰兒えいじの冬着らしかつた。

恋妻は、やがてよき母となつてゆく。——だのに、環は、どこにいるのか。

真雄は、月の下を、黙々と歸つて来た。

その年——天保六年

秋もすぎ、雪に交じつて、木々の冬葉が舞う空になつても、真雄は、とうとうまだ一作も、刀を鍛うち上げていながつた。

咲き出づる時

『内蔵さん。……どうしたのさ。内蔵さんてば。……弱いくせに、飲めもしないお酒を、自暴に飲むんだから、困った人ねえ』

湯女のお寿々は、持て余したように、上り口へ打つ伏したままでいる若い浪人の体から手を離して、呆れ顔に、ただ眺めてしまった。

浪人は、環であった。

ここは、上田の城下に近い別所の温泉場であった。まだ故郷に遠くないので、身を恥じてか、環という名を捨て、別名の内蔵助をもじって、内蔵吉と名乗っていた。

お寿々は、通い湯女で、小さいながら、湯町の裏に、一軒持っている。——去年、家へ去って、一先ずここの温泉宿に沈湎していた環は——いや内蔵吉は、その宿でお寿々の世話になったのが縁で——金がなくなつた頃からつい女の家へ移っていた。

お寿々は、彼の苦悶を知るよしもない。じつと、沈湎しているかと思えば、ぷいと出て、酔って帰る。

湯町に巢喰う遊び人の仲間に入つて、博奕わるきをしているのも知っていたが、それでも男に、愛想あいそが尽きたとは思わないお寿々だった。

『風邪かぜをひいても、知らないからいい。——ほんとに、この人は』

口が酔すつぱくなくなったように、すぐその鏡台と長火鉢の間へ、つんと坐りかけたが、やはり氣に懸かけずにはいられないで、

『ね……起きて、座敷で樂に、横におんななさいよ。後生だから』

肩を揺ゆすぶると、上り框がまちにしゃがみ込んで、踏み板へ、涎よだれを垂らしていた内蔵吉は、

『う……うるせえなあ』

『うるさいじゃありませんよ』

『水みずをくれ。……水、み、みずだ』

『上げますから、家へ上りますね』

茶碗に、汲くんで渡すと、ぐつと飲みほして、

『お寿々、いろいろ世話になつたなあ』

『何を云つてるのさ、この人は』

『いや、酔すつちやあいねえ』

『それだけ酔っていればたくさんでしょ』

『五合や一升で、性根しょうねを失つてたまるものか。本性だ。お……おらあ、本性で礼をいうんだぜ』

『そのうち醒めるでしょう。何でも、仰つしやいよ』

『此家ここへ来たなあ、去年の春の末だったかなあ。あれから、一年半、もう秋だ……早いなあ』

『ホ、ホ、ホ、ホ。……それから』

『洗濯物の世話、小費こづかいの世話、年月は短けえが、浅い恩たあ思わねえ。別れた後も、年上のおめえだから、姉さんだと思つて、忘れずにいるからな』

『いやだねえ、手なんぞついて。格子口から見えるじやないか。見ツともないから、もう引つ込んでくださいよ』

『引つ込むんじやねえ、こ、これから、おらあ旅立ちだ。……じゃあ、姉さん御機嫌よく』

『あらつ——』と、お寿すず々は、土間へ飛び降りて、

『どこへ行くんですよ。そんな、だらしない恰かっこう好して』

『旅へさ』

『えつ……。本気かえ、おまえさん』

二

酔うと青白くなる酒の性である。

内蔵吉は、じつと、お寿々を見つめた。お寿々には、男が、冗談なのか、本性なのか、解らなかつた。

『いつも、与太ばかり云っているから、今日も、それかと思うだろうが、実あ先刻、湯宿の二階から、いきなり名を呼ばれたので、はつと仰ぐと、松代藩の柘植嘉兵衛というお人。おらあ、夢中で逃げ出した』

『仇とでも、狙われているんですかえ』

『仇どころか、寝るにも、足を向けねえつもりのお恩人だ。だが、その御恩人に、この姿は、見せられねえ。——総身に汗をかいて、沁々と、おらあ今日は、考えたのさ』

『考えたとは？』

『こうしちゃ居られねえ身だ。何処ぞへ行つて、おらあ生命がけで、日本一の刀鍛冶に成

つて見せなければやアならねえ。——身の出世に、あくせく足搔くわけじゃあねえよ。——
 そうしなけれやあ、済まねえお人が、柘植様、おふくろ様、兄貴、それから……それから
 未だ……幾人となくこの世にいるんだ』

『だから、わたしを、捨てるんですか』

『——と、大概、極めつけて来るだろうと思つたから、何もいわずに、行こうと思つたが、
 酔いつぶれの仮面をかぶつて、一言、礼に來ただけでも、可憐しいと思つてくれ』

『嫌です。何が、そ、そんな口が、可憐しいものか』

『堪忍しろ！ お寿々』

とんと、女の胸を突いて、内蔵吉は格子の外へ、すばやく姿を消してしまった。

お寿々は、甲だかい声をあげて、往來まで走つたが、すぐ人目を思つて、裸足で泣く泣
 く歸つて來た。

その翌日、彼女の家は、戸が閉まつていた。家財も、前の晩に、こつそり道具屋の手に
 移されて——。

あの後は、恩人柘植嘉兵衛も、さだめし辛い立場にあつたろう。

或は、藩の中で、けいはい軽輩の身では、自分以上の、苦境だったかも知れない。家老の矢沢けんもつ監物が後援する直胤一門の圧迫もあつたろう事は、想像に難くない。

(その恩人へ！)

と、思うと、内蔵吉は、濟まない——と胸で掌てを合せたぐらいでは居られなかった。

湯町の長脇ながだす差などと、酔い歩いている醜い姿を、その人に見せた儘、振向きもせず、つい逃げてしまったが——それでいいだろうか。

(たとえ、十年先、二十年先に、一人前の劍工となつて、詫びをするにしても、その長い月日の間)

と、恩人の惨心を思うと、居ても起つても、いられない。

ひよつとして、嘉兵衛が、その消息でも、赤岩村に残してある、老母の所へ便りでもしたら、母は嘆きのため、寿命をちぢめるかもしれない。

『そうだ……せめてこの気持を……柘植様だけにでも、洩もらして去ろう』

冷たい秋の夕霧が、そうつふや呟いてゆく、彼の面おもてを吹いた。

千曲の水に添って、彼は、野を歩いた、河原を歩いた。

そして、故郷の山へ、辛い顔を反^{そむ}向^むけながら、もう一度と、眼をつぶる心地で、松代の城下に近い、川中島の小島村まで来た。

その満照寺には、知っている坊さんがある。七日ばかりの逗^と留^{りゆう}をたのみ、身を潜めて、柘植嘉兵衛へ宛て、自分の心を披^{ひれ}瀝^きした審^つさな手紙を認めた。

『浄明さん。誰^だ方^かか、この手紙を持って、御城下まで、お使に行ってくれる人はありませんかな』

『子供でよう分るお使ですか』

『ええ、お小僧で結構です。ただ、名宛の柘植様は、先頃、別所でお見かけしましたから、ひよつとしたら、お留守かもしれません。そしたら御新造様へお渡しして、よくお願いしておいてもらいたいので』

『承知いたしました』

その使が出た後で――

『お世話になったが、明日^{あす}、出立しようと思ひます。寺に有合せの、古^{ふる}笠^{がさ}古^{ふる}脚^き絆^きで結構です。お恵みねがいたいものだが』

『お易いこと。……だが一体、どこへ行くんです』

『皆目、的はございません』

『的もなくして』

『どうか成りませう。江戸でいけなければ上方、上方で人間になれなければ、中国、九州。——土と鉄気のある土地なら、鍛冶小屋の一軒ぐらいは、どこかに建ちませう』

浄明はその晩、彼を炬ばたに招いて、芋粥いもがゆに一杯の酒を温めてくれた。

(人に顔を見られぬうち——)

と、翌る朝は、暗いうちに起き、浄明にも黙って、そつと庫裡くりの横から戸を開けて出た。朝の月が、まだあつた。

虚空山も、戸隠山も、黒姫も、眠たげな霧につつまれている。ポトポトと、そこらの松や破れ廂やびさしから、露が降っていた。

——二足ふた、三足み、歩き出した時だった。

露の音すら耳だつ暁方あけがたの静寂しじまを破つて、ふいに、ぐわあん！——と大空が鳴った。

『おやつ？ ……何だろう』

川中島の疎林の上へ、ぱつと、小鳥の影が埃みたいに立った。

と、思うまに又、

轟ごうン——轟ごうんっ——

朝の雲が、裂けるかのような、強い響きである。

彼は、その音響に、気をとられながら、仄ほの暗い山門の下を潜った。そして石段を降りて、十歩も歩み出したかと思うと、

びゅるっ——

どこかで、烈しい弓鳴ゆなりのするように、空気が鳴って、轟ごう然ぜんと、十間ほど先の大地に、大砲の弾が炸裂さくれつした。

地を揺り上げられた心地で、はッと恟すくんだ途端に、小石交じりの土が、焰えん硝しょうのけむりと一緒に、びしやツと、飛んで来た。

『——あっ』

と、内蔵吉くらわざちは、両手で、眼を蔽おほった儘、大地へ俯つ伏した。

四

——暫くは、耳も気も、遠くなっていた。
と、程なく。

野駈け支度の藩士たちである。ひどく狼狽した態^{てい}で六、七名ほど、ばらばらとここへ駈けて来るなり、内蔵吉の姿を認めて、

『やつ、怪我人が』

『^{ふかで}深傷か』

走り寄つて、彼の体を抱き起した。

石交^まじりの土砂に飛ばされたのである。腫れ上つた顔を抑えながら、

『何、大した事じやございません』

内蔵吉は、やつと、気がついて首を振った。

『お離してください……大丈夫ですから』

『待て、手当をして遣^{つか}わす』

『それには及びません』

『駄目だ、顔から、血しおが流れておる、脚も、何^どうか致さんか』

『ようござんす、離しておくんない』

『待てというに』

よほど、責任を感じているとみえ、藩士たちは、無理に、彼の血を拭い、そして薬を塗りなどしていた。

『何うじやな、怪我の容子は』

そこへ又、一人の組頭らしい藩士が加わって、心配顔に、内蔵吉へ直かに訊ねた。

塗の陣笠に、金箔摺の紋が、朝露に濡れていた。大きな口、濃い眉、そして滅多にない長面の人物である。年ごろは三十がらみとしか見えないが、炯々と光る眼が、むしろ底気味わるいほどだった。

『砲術調練中の過失じや。鳥打峠の岩鼻を的に狙撃しておった反れ弾が、射手の未熟のため、こんな所へ落下した。——許されよ。御浪士』

丁寧な謝罪なので、

『はっ』

と、内蔵吉は、思わず、大地へ手をついてしまった。いや何かそういう人物の、威圧に打たれた感じだった。

『幸に、傷が軽微で、此方も重畳じや。……歩行におさしつかえはないか』

『お案じ下されますな、さしたる事はございませぬ』

『どこかで、お見かけしたようだの。……はてな？ ……拙者は、松代藩の学問所頭取、佐久間修理じやが』

『あつ、では貴方様が、象山先生でございましたか』

『御浪士は？』

内蔵吉は、はつと、言葉につかえた。

蘭学、医学、海防、砲術、植林、化学と、あらゆる新時代の知識と、東洋の儒学とを併せて、今の時代的風潮の中に、巨人のように、諸藩からも仰がれている人が、正しく、礼儀をもって先に名乗っているのに——嘘は云えない気がしたのである。

と——象山の次の言葉は、苦もなく、彼のためらいを救ってくれた。

『ウーム、思い出した。昨年じやったか、長国寺の寺内で、刀試しの折に見かけたことがある。——その折の山浦真雄が舎弟ではなかったかな』

『はいっ……』と、是非なく、

『山浦の愚弟にござりまする』

と、内蔵吉は、又、面伏せに、頭を下げてしまった。

五

今の姿は、誰にも知られたくなかった。然し佐久間象山ほどな人が、兄の真雄の名を知っていてくれたのは欣うれしい。

象山も、兄の作刀を持っているのだろうか。持たない迄も、観ているに違いない。

刀試しの日も、居合わせていたといえ、刀の鑑かんしき識もあるに相違ない。訊いてみたいものと思った。

——が、内蔵吉は、体の痛みを覚えるとすぐ、

(この人に、そんな事を訊いたら、きつと笑い草だろう)と、怯ひるんでしまった。

此の人の家には、世界の海陸を画いた大きな地球儀があるという。又、軍艦を造る造船学の書、西洋兵術から砲術火薬の書物——そんなもので室へやが埋まっていると聞いた。

三尺に足らない刀の——刃がこぼれたとか、曲がったとか——そうした問題は、此の人の眼からは、蟻ありに歯が有るか無いかを、争うような、小さな問題としか聞えまい。

『旅支度の様子らしいが、どこへお出での途中じやな』

『はい……』と、これにも又、内蔵吉は正しく答えかねて、唯、

『江戸表まで参りまする』

と云つた。

象山は、聞くと、

『ほう、江戸へか。偕さては、遊学かな。いい事じや。若い者はどしどしと、中央へ行つて、

日本が今、世界の中でどう動いているか、又いかに我が国が今——又将来、多事多難な時代の潮に向いかけておるか。そういう事にも、篤とくと、眼を啓ひらいて来なければいかん。餓はなむ

別けいたそう』

と、矢立から筆を出して、自身の扇子へ、さらさらと、一枝しの桜花さくらと、一首の歌を書いてくれた。

人みなも

咲きいづる時を

あやまらで

さくこの花に

ならえとぞ思う

跛行と鉄車
びっこ

一

『今だ。咲き出づる時は今だ。おれの年頃も、世の中の黎明あけるのも。……何だか、そんな気がするなあ』

彼は、跛行びっこをひきひき、峠とうげを越え、又、峠を越えて、東へ行つた。
休むたびに、象山から餞別せんべつにもらつた扇子を出して見ては、

『——人みなも、咲きいづる時をあやまらで、さくこの花にならえとぞ思う』
を、何度も口で誦うたつてみた。

深い谷をのぞいた。そして、高い秋の天そらを仰いだ。

『なんだ！ 意気地のない』

彼は、勃然と、自分に肚が立った。象山が何者だと思うのである。こんな扇子をもらつて、有難がつていゝような事で、何うして、大志を抱いて成すことが出来よう。

彼は、扇子を、谷へ投げた。

白い蝶みたいに、それは千仞の底へ、吸われて行つた。

『おれは、おれの道を、歩いてみせる！』

そう思つて、高原にかかった。雲は、跛歩をひく足よりも低かつた。

芒の果から、濛々と、黄色い砂塵が立つて来た。

二

近づくに従つて、それは一隊の牛に曳かせてくる鉄車だと分つた。およそ二十台もあつた。菅笠、陣笠、布笠など、汗にまみれた武士や足軽が叱咤して、牛と人足とを励ましてくるのである。

新発田藩御用

車の一台一台に、木札が打つてある。

今日も、彼は又見た。それは大砲や西洋式の小銃や、火薬箱を積んだ輸送隊である。

上田、松代、松本の諸藩、榊原家の隊伍にも、これで会うのが二度目だった。——彼はその砂埃りを浴びて摺れ違ふと、急に心が暗くなって、道にも迷う気がして来た。

『これからの戦争に、鎚の先で打つ刀などが、物の役に立つだろうか？』
そう考えずにいられなかった。

『調練場で撃つのでさえ、あれほど威力のある大砲。——それにひきかえて、鎚の打ち方の、火加減の、湯の秘伝のと、一本の刀にも、血を吐くような苦しみを、あげくに、折れ易いとか、曲がるとか、死んだ末代の先までも、とやかく云われる刀鍛冶と——』

彼は、ふと、

『止そうか』

と、嘆息ついた。

そう思うと、一步もあるけなかった。道ばたの草叢へ、どっかり腰をくだいてしまう。うつろな眼で、雲を見ていた。——と、母の顔が思い出された。兄の姿、妻の寡れ、子の泣く声。

『——ああ、解らなくなつた。象山先生も、何とか云つた。日本は今、うごいている。行く手には、国難が横たわつている。——そんな意味だった。何だか、おれの身を云われたような気がしたが』

いくら雲を見つめていても、彼には、時勢が映らなかつた。日本の土の上に享けた生命である以上、その身自体が、一つの小さな国体であり、国の迷い国の悩みと共に在ることを——その時まで、彼のうつろな頭には自覚できなかつた。

『もしもし、間違つたら御めんなすつて』

と、彼方から急ぎ足に來た足ごしらえのよい町人が、ひよいと、疲れた彼の顔の前で、足を止めた。

『もしや貴方様は、山浦内蔵助さまと仰つしやいませんでしょうか。てまえは、松代の飛脚でございますが』

『え、飛脚屋。——いかにもわしは、山浦だが』

『柘植嘉兵衛様からの御手紙でござりまする』

『おお、嘉兵衛どのから、追いかけの御返事か』

飛脚は、江戸へゆく途中とみえ、それを渡すと、鳥影のように、高原の道を先へ行つて

しまった。

いそいで、封を切つてみると、細々と、故郷の消息が誌してある。

『……ああ、まだ母は、生きているな』

すぐ彼の眼は、潤みだした。

（——兄の真雄も無事、妻子も無事、赤岩村には、何の後顧もない。然るにそちは、何とした事だ。別所の湯町で、ふと姿を見た時、わしは泣いた）

手紙の途中で、彼はそれを拝んで、

『おゆるし下さい。おゆるし下さい』

声を出して云つた。

（——だが、満照寺からの、消息に接して、わしの嘆息は、欣びに一変した。当初の志を抱いて、江戸へ立つ由。大慶この上もない。その初志を貫かねば、そちが養家を出た苦衷も、何の意味もなくなってしまうであろう。何事も、顧ずに行け。そしてよい師に就くことが肝腎だ）

と、懇切なことばの後に、江戸へ出たら、同封の紹介状を携えて、幕府のお旗本、窪田助太郎どのの門をお訪ねしてみるがよい——と結んであつた。

彼は、迷いの霧を、払われた心地がした。この一人の恩人に酬_むいるだけでも、劍工として立つ意義がある。

『そうだ。たとえ一振でも、末代に残る銘刀と称_なわれる刀を鍛_うたぬうちは、この足を、二度と、信州へは向けねえぞ』

彼は再び、傷_{いた}む脚を鞭打_つて、碓氷_{うすい}峠を、東へ越えた。

砲や銃を積んだ牛車は、次の日の途中でも、西へ西へと、轍_{わだちきし}を軋_こらせて行くのを見かけた。

土蔵から物置へ

一

騒がしい時勢の中に、月日の流れは、殊に早く思われた。

上方には大塩平八郎の乱がある。忘れやすい世間の脳裡から、それが消えると、沿海の諸国から、頻々ひんびんと、露艦を見た、英艦がうろついている——などと黒船の飛報がはいる。市井しせいには又、高野長英だの、渡辺崋山だの、市民を戦慄せんりつさせるに足る国禁事件が、降つてわく。

——でもまだ、日本は醒めていなかった。むしろ、江戸文化の終りに来ている頽廢たいはいてき的な風は、吉原に、陰間茶屋かげまぢやに、歌舞伎町に、役人の裏面に、町人の遊蕩に、鼠小僧の出没に——いろいろな社会層へ互むたつて、腐すえたる物の美しさと、醜悪を彩る絢爛けんらんさに、都会も酔い、人も嚙言たわごとを云つて日を送つていた。

だが。

天保十一年、十二年となると、支那の鴉片戦争アヘンせんそうのうわさは、海をこえて、日本の上にも拡がつて来た。

西洋文化を載せて——偽装した平和の侵略艦隊が、東洋を嗅かぎ歩いて、もう香港ホンコン、上海ヤンハイまで襲せて来たのだ。

支那しなは、鴉片アヘンを売りつけられ、支那自身が、鴉片の害毒を知って、その洋商を排斥し、その物貨を焼いたのが原因で、侵略艦隊を降りた紅毛兵は、平和の仮面をかなぐりすてて、

長江を溯江し、南京城まで攻め上つた。

為に、支那は、香港を奪られ、上海を割かれた。

味をしめた利権占領軍は、南風を窺つて、次の獲物——日本の近海を、游弋しつつあると、説く者がある。

海防の警鐘は、頻りと鳴つて、

(日本、準備せよ)

と、憂国の声は、しきりと伝わる。

だが、江戸は醒めない。

ここの民衆は、余りにも、幕府だけを知つていて、日本そのものの本来の相と、日本全体が見えなかつた。

——そうした今年の江戸の夏。

山の手の四谷の一劃は、屋敷町の閑寂な木立に、蝉しぐれが啼きぬいていた。

ただ此頃のこと、この界限に、炎天の真昼も、時には深夜でも、異様な音が、左門町の木の間から流れてくる。

カーン！

ティーン！ カーン！
 冴えた鎚の音であつた。

二

『窪田先生。あれは、お宅ではないのか』

庄内の酒井家の臣、加藤宅馬と松平舎人の二人が、ふと客間の書院で、耳を敬てて訊ねた。

主人の窪田清音は、

『ム。あの鎚音でござるか』

と、微笑をうかべた。

『そうです。時節がら、鎧でも打たせておいでなざるとみえる』

『刀鍛冶じや』

『ほ。——御邸内に、刀鍛冶がおるとは御重宝な』

『そう、重宝でもない。見所のある者故、物置小屋を直して、鍛冶小屋に与えてはおる』

が、若いし、容貌はよし、天才肌な男なので、女に好かれて困る』

『はははは。そう三拍子揃ったのも、厄介やっかいかも知れぬ。何と申す者で』

『信濃の産で、山浦内蔵助、環たまきともいい、刀銘には、そのほか正行まさゆきなども彫ほっておるが』

『お手許に、作刀がござりましょう』

『ござる。見てやってください』

窪田清音は、立つて、床脇から、彼の鍛うった一ひと振りを取ってそれへ差出した。

鍛うちおろしの中身なかみを一見して、二人は、交《こもごも》に、驚嘆した。殊に、加藤宅馬は、鑑刀の眼もきくし、愛刀家といわれていたが、これは、古刀の名だたる銘作と比較しても、遜そん色しよくのない物とまで——口を極めて賞めた。

『そうかなあ』

窪田清音は、にやにや笑った。

彼自身も、刀には眼利めききと、人にゆるされておりながら、そう云うのだった。そして、欣うれしそうな容子がつつめなかった。

『一体、こんな名刀が、どうして、お宅の物置小屋などに、埋れているといつては失礼で

すが、世間にも知られずに居るのですか』

二人は、数年前の、兵学の弟子だったが、今度の出府に、挨拶に来たものだったが、今の一刀を見ると、もう他の話は忘れて、熱心に、膝をのり出した。

三

一片の紹介状を持って、山浦内蔵助が、ここの門を叩いたのは、もうすでに六、七年前になる。

(働いてみい)

窪田清音が、彼に与えた仕事は、ここの足輕奉公だった。

仲間ちゅうげん 仕事を、二年やった。

(書生に取立ててつかわす)

次の一年は、玄関の取次番に坐り、朝夕、雑巾ぞうきんをつかんだ。

三年目に、初めて、

(何が希望だ)

と、訊いてくれたのである。

内蔵助は、抱負ほうふを話した。

(では、見せて遣わす物がある、尾ついて来い)

土蔵へ伴なわれた。

(毎日、ここへ籠こもつて、当分、勉強べんきやういたすがいい)

と、清音は云った。

刀長持かたながもちの中には、古今の銘刀が何十振とあつた。相州物、備前物、肥前その他、彼

がまだ接したことのない稀まれな名匠の作もあつた。

彼は毎日、土蔵の中で、その作品作風を見て、自己の工夫くわふを凝こらした。そして今——初め
て松代の長国寺内でやつた自分の行為や言葉を、冷静に振ふりかえ顧かんつて、

(若わかかつたなあ)

と、自分の未熟みじくを、はつきり覚さとることができた。

そして計らずも江戸へ出て、良い恩師に就いたことを感謝した。

旗本窪田助太郎は、お広敷番から弓矢奉公まで勤めた人だつた。清音すがねと人が称よぶのは、
千蔭風ちかげの書をかいたり、和歌を詠んだり、国学に通じていたりするので、その方の名が、

通称となつたものらしい。

講武所取立とりたての折、兵学の講義をうけ持ち、御留守番まで進んだが、もう身を退いて、閑役となつている。年配は六十二、三。——然し、がつきとした体質で、壮年から田宮流の剣道、無辺無極流の鎗術、中島流の火術——とみな一派の師となるほどな腕があつたという面影おもかげも今、偲しのばれる。

で、邸内には、講堂もある、道場もある。

内蔵助は、その文武二つの床に、この数年、いかに教えられて来たか、知れなかつた。その上にも、今また、土蔵の中で、親しく巡り会めぐうことのできた——無数の古人の師。

(ああ、ここはおれの、大蔵経の経蔵だ)

彼は、自分の多幸たこうに、思わずそう云つて、感謝した。

その間に、邸内の物置小屋を、少しばかり改築して、鞆ふいごをすえ、火土ほどを築き、鍛冶道具も窪田清音が備えてくれた。

土蔵から、彼は、物置小屋へ移つた。

然し、彼の人間には、知識の光りと、技倆ぎりようの上達が、清音の眼にも分るほど付いて来た。

四

『内蔵助、ちよつと参れ』

『お召ですか』

と、彼は、清音の前へ呼ばれて来た。

今し方、客の酒井家の家臣たちが帰つて、間もない後だった。

『近頃、夜は鍛たんようじやな』

『はい』

『邸やしぎにも居らぬ事がままある。どこへ参るのか』

『はい』

『近所の酒屋その他へ、だいぶ借財もあるとの事だが、何でそのように、金づか費かいが荒いの

じや』

『はい』

『酒は好きか』

『好きです』

『酒だけにしては何うか』

『はい』

『貴様の瑕きずは、とかく、女子おなじとのうわさが絶えんことだ』

『心得ております』

『心得ながらなぜ自誠せぬ。まだ、これからという分際で』

『女子の方からうるさく付き纏まとうのです』

『だまれ。莫迦ばか』

『はい』

『——改めて、今日かように、そちの身持について申すのも、実は、其方に取つて、大事な機会いきわが参つたからじゃぞ』

と、誠まことめた後で、清音は、自分の吉事きちじのように、次のような目企めくろみがあることを、彼に告げた。

それは先刻さつき帰つた客の——加藤宅馬、松平舍人とねりの二人が発案で、物置小屋の隠れたる名工、山浦内蔵助を世に出すために、武器講という会を立てようというのであつた。

つまり山浦内蔵助作刀頒布会なのである。口数を百口として、酒井家は勿論、旗本仲間、各藩の有志に、刷物を廻して、会員を募ろう。額は一口三両とする、そしてその半額を前納してもらい、やがて、内蔵助が本格的な鍛冶小屋を持つ資金としておいたなら、彼の将来には、刮目するものがあるにちがいない。これは、隠れたる天才を世に送り出すものだ。同時に、少額な金で、すばらしい新刀が手に入れば、時節がら、武士の腰にも、精彩が加わろう。——と、そういった趣旨の計画なのである。

『どうじやな、貴様の心底は』

清音は、彼の為に、又とない機会と、この企てを、欣んでいうのであった。

『結構です』

『結構だけでは心もとない。この企てには、責任があるぞ』

『やります』

『万一の儀があると、発起人、世話人など、連名していただく方々のお顔に、泥を塗る事になるぞよ』

『は』

『——と、まあ、わしの老婆心じや。然し、そちの技倆も、加藤殿のようなお目利が、認

めて下さるように迄なつて、わしも共々欣ばしい』

『皆、御高恩による所でございます』

『何の、そちの天質と努力のいたす所。今日となつては、もうそれを世に問うて見るも早くはなからう。滅多にそこらのお天狗な刀鍛冶たちに負けはとるまい。この上とも、精進一途に、大を成すように心懸けい。それには、身も慎んでな。——よいか』

『……はい、はい。分りましてござります』

清音の愛は、師恩を超えていた。情誼じょうぎに感じやすい彼はすぐ涙になつてしまふ。誓つていい刀を鍛つて酬むくおうと思つた。酒も慎しみ、女も断ち、あらゆる慾望や誘惑にも打ち克つて——と、胸のうちで、繰返して念じた。

それから間もなく、「武器講百刀会」は生れた。彼は、その時から、優れたる劍工として、社会へ送り出された。

発起人には、窪田清音や知名の旗本や、酒井家の藩臣たちだの、巢立ちの一劍工にはむしろ過ぎた位な人々の名が連ねられた。

百口ふりの申込みは、瞬またたくまに、加入者で満たされてしまった。——同時に、物置小屋の鍛刀所では、何かにつけて不便なので、清音の屋敷から遠くない、四谷北伊賀町に一軒借りうけ、そこで、彼が江戸に於ける第一声の鎚つちおと音を、初めて、揚げることとなった。

一刀、一刀、又一刀——と、彼の作品は、そこから生れて、百刀会の加入者たちに、籤くじ引の順で渡されて行つた。

その裏には、彼の凄まじい精進が、赫かつかく々と溶鉄の炉ろに燃え、骨を削り血を吐くような苦心と研究が潜ひそんでいた。

仕事場に立つて、鎚つちを把とればさながら鬼、深夜、土や焼刃の思念に痩せ苦しむ影はまるで現うつつな幽人であった。そして、朝あしたに、自己の会心の作を研ぎあげて、

しめた！

と、彼自身がさけぶ折などは、まったく神か、嬉々たる児童のような、歡びの姿だった。——人は、そこまでの彼は見ない。

彼の作刀を見た者は、唯ただ云つた。

『これはすばらしい。国広くにひろ、康継やすつぐ、虎徹こてつ、水心子すいしんし、それから近頃の直胤——なんど

にも劣らぬ作だ』

『いやいや、そんな新刀鍛冶の作振さくぶりとは、懸け離れて、室町、鎌倉期あたりの古人の名作へさえ迫るほどの所がある』

『何しても、格が高い、気品がある。鉄味かなあじのよさ、刃作りの妙、相すがたの麗わしき、又この匂い。師匠譲りの、生やさしい技や口伝だけで、鍛てるものじゃない』

『新刀鍛冶は、みな墮落したといわれておるが、えらい鍛冶が出て来たものだな』

『近來まさむねの正宗まさむねだろう』

『ム。四谷正宗だ』

慧星すいせいのように現われた彼の名声は、ただ秘伝口伝や門流かの殻からにかくれて、偉そうな切銘と見てくだけで無事泰平な鈍なまくら刀ばかり叩き馴れて来た無数の刀鍛冶たちへ、

——こいつは？

と、大きな狼狽と、衝動と、刺戟もたらとを齎もたらした。

そこに又、彼に対する、嫉視しっし、中傷の反動も拳がらずにいない。

当時、江戸で巨匠といわれる鍛冶には、二代水心子正秀の一門があり、又、莊司箕兵衛直胤も松代から移つて、秋元あきもと侯を背景に、下谷御徒町おかちまちに、堂々たる門戸を張っていた

が、そのほかの群小刀鍛冶に至つては、無数と云つていい程あつた。それ等がみな、一弦げん月懸かかつて萬星滅す——四谷正宗の名声と共に光りを薄くしてしまった。

然し、その名声を慕つて、四谷北伊賀町の彼の仕事場を訪ねて行つても、鈍音のしない日は、見つけ出せないほどそこは小かな家だつた。

又、彼の刀の切銘きりめいは、従来、「信濃国正行」とか「山浦内蔵助」とか又ただ「環」とか、その時々で切つていたが、やがて四谷に住んでから、

みなものきよまろ
源 清 磨

と、作品に切るようになった。

清の名乗なのりは、勿論、恩師窪田清音すがねの一字。一刀一刀鍛つごとに、鉄へ切り込む鑿たがねのごとく、その人を忘れまいとする彼の気持から選んだ名であることはいふ迄もない。

そして、近頃、取つた一弟子にも、清人きよひとという名をつけてやった。

木の葉雨

弟子は、他にも二、三名は取ったが、師匠清磨の烈しい精進に寄りつけないで、よく出たり這入ったりしていたが、清人だけは離れなかった。

清人は仙台生れで、出羽某とかいう田舎鍛冶に就て、修業の下地はあつたし、鈍な代りに、正直で朴訥だった。清磨も、仕事ではよく怒りもするが、特別、可愛がつていた。

『師匠』

と、その清人が、或る日云う。

『なんだ、いやに改まって』

『お願いがあるんです』

『おれに？』

『へい。……他じゃありませんが』

『何をもじもじして居るのだ。どうも汝は煮え切らねえ男だ。刀鍛冶が、そんな鈍じゃあ

駄目だ。もつと、すつぱりと、齒切れをよくしろよ、齒切れを」

『じゃあ云います。……云い難い事なんです、今朝、師匠が井戸端で、顔をお洗いなった後、ひよいと流して見ると、師匠の吐いた痰、唾の中に、赤いものが交っていました』

『……ム。血だろう』

『じゃあ、御自分でも、知っているんですか』

『いちど、もつとひどく、血を吐いたこともあるから』

『何で、それを打つ捨っておくんです。実あ私は、ずっと前から、お次さんに注意されて、気をつけて見ていたんですが……此頃は、殊に師匠のお体が痩せて来るし——心配で堪りません』

『お次が……そう云っていたのか』

『どうか、御意見をしてくれと、お次さんから頼まれたし……私もそう思うんで、叱られるのを覚悟で申します。——どうか師匠、余り仕事で無理をしないで下さい。それと、お酒を……もう少し減らして飲むわけにはゆかないでしょうか』

清麿は、黙って、俯向いたまま、聞いていた。云われなくても、胸の痩せ、膝の痩せ、病魔に蝕まれている体は、自分の手で撫でてはわかる。

百刀会の百口鍛ふりち上げにかかると共に、一時は杯さかずきを捨ててもみたが、鬼となって、仕事へ打ち込む情熱は、酒へもつい燃えつき易く、一唇くち触れれば、ままよとなって、一升二升、暮れても明けても、分らない彼の酒だった。

それが、病びょうく軀けずを削けずつてゆく――

清麿は、知らないではない。

だが、人には云えない、心の内には、人間の誰にもある苦悶の巢がある。――故郷の事ども、其後の母の死、残して来た妻や子や、兄真雄さねおの境遇にも。

『……………』

沈ちんめん漚うと、今、弟子の前に俯向うつむいている清麿の青白い面おもてには、それがありありと刻まれていた。

いつか、十年はあれから過ぎた。その後、故郷くにに起った禍も皆、自分が残して来た禍根かこんのように責められるのだった。長国寺の事以来、藩老の矢沢監物から睨まれて、恩人柘植嘉兵衛の失脚――兄真雄へのさまざまな迫害――妻のお咲や梅作の身にも、前の養子先の縁者たちを繞めぐつて、種々いろいろうるさい事情や拘束も起っていると風の便りに聞いている――。

その上に、数年前、自分の居所もまだこつちから知らせぬ間に、母のお菅すげも死んだとあ

る。柘植嘉兵衛の消息も知れない。

四谷正宗の、又、清麿は名人のと、人はいう。空くうな名声は晴れがましく云う。

——だが、誰に今、その一剣を捧げよう。

『清人、よく云つてくれた、これから気をつける。だがな、酒だけは、たんと飲やらないようにするが、少しは、ゆるしてくれ。愚な師匠と、笑うだろうが、見ないふりをしていてくれ』

二

裏は敷やぶで、椿の木が多い。木立ちの向うに寺の寺内が見える。

この界隈かいわいの屋敷といえ、伊賀者衆の組屋敷だった。

お次はよく、その露地を、人目忍んで来る。清麿の家は、破れ垣に囲まれていた。こども、伊賀者衆が住んでいた古家の跡かも知れなかった。木戸を開けると、空地のように、荒れた庭と鍛冶小屋が東の片隅に見えた。

そつと、台所を覗のぞいて、

『清人さん、いますか』

小声でいう。

『あ、お次さんか。きのう持って来た小鯨こあじは美味うまかつたぜ。師匠も美味いといっていた』
 『じゃあ、清磨さんも、喰べてくれましたか。……今日は、お洗濯物が乾いたから、綻ほころびを縫ぬって持って来ました』

『毎度、すまないなあ。お次さんが居てくれるので、まったく、助かるというものだ』

『お師匠様は』

『ぶらつと——出て行つたが、伝馬町の表通りで、会あわなかつたかい』

『いいえ』

『手紙を書いていたから、飛脚屋へ行つて、故郷いなかへ金を送りに行ったのかもしれない。そんな用事だけは、自分でそつと出かけるから』

『お故郷くにには、残して来たお内儀様と、お小さいのがおひとり居るんですつてね』

『おれには、何も話さない。飲まないと、無口な師匠だからなあ』

『この頃、お酒は……』

『やまないよ、あれだけは』

『お体が丈夫ならいいけれど……。それが心配でたまりません』

『酒も酒だが、仕事もいけないなあ。あたり前にやっていれやあいいけれど、師匠のは、一本の刀が鍛ち上がるたび、一本の骨を削って行くようなものだ』

『百刀会の刀は、もう皆さんに渡ったんですか』

『どうして、もう二年にもなるが、まだ何本も仕上げちや居ない。金は要るから、あらかた取って費つちまつたらしいが、どうするんだろ、いったい』

『他の刀鍛冶のように、手伝いでも入れて、早く仕上げて、次のお仕事をなさればいいのに』

『それが出来ない師匠なんだよ。あれじゃ一本、百両取っても、合やあしない』

『……つい、お喋りしてしまった。お師匠様のいないうちに、お部屋の掃除をしておいてあげよう』

彼女が此家へ来るたびに、家の中から、無性な埃りが払われた。

お次は、窪田清音の屋敷にいた小間使であった。まだ、清麿がそこにいた頃、ちらと、男女にうわさが立つとすぐ、苦労人の清音は、穏やかに、彼女を家元へ帰してしまったものである。

——だが、便りはそつと、つづけて居たらしい。清麿が家を持つと、彼女は、叔父の家から、足しげく、北伊賀町へ姿を見せた。

二十一、二の年ごろで、下町育ちの歯ぎれと、情操じょうそうと才さいとが、清麿の気もちにびつたり合つた。然し彼は、窪田清音の誠いましめがあつたばかりでなく、血を吐く胸の病びよう 竈そうを自覚してからは、触れてならない花のように見ていた。そして、それを冒おかしかける自分の心を、時には惧おそれた。

三

晩秋となると、この界限の屋根も廂ひさしも、木の葉の雨だ。

今朝も彼は血を見た。——唇くちからである。

『ゆうべの酒が崇たたつた……』

と、思う。そして慚ざん愧きにたえぬ面を井戸に洗う。

鍛冶小屋に霜が白かつた。

清人が、朝早くから、一人でコチコチ仕事している。彼自身の作にかかっているのだ。

『どうだ、銘刀が出来そうか』

『あ……お眼ざめで』

『いい、いい、おれの事はいい。今度の仕事は、お前の腕が初めて世間で試めされる大事な一本だ。慥乎しつかり、鍛てよ』

『師匠のように参りませんが、師匠の一心不乱だけは、学んでやる覚悟です』

正直者だけに、清人は、唇を噛みしめて、その一生懸命な意気を、顔つきに描いて見せた。

それは、首斬り役の山田浅右衛門から来た注文なのである。清麿に——という依頼であったが、

(刑場で使う刀は鍛たない)

と、あっさり断ったので、ならば、お弟子の内でもというので、清人を世に出してやる為に、引請けたものだった。

首斬浅右衛門が、誰の作は斬れる、と折紙つければ、劍工として、一人前の札がつく。

——慥乎しつかり、鍛てよ、と彼が激励したのは、正直で鈍重なこの一弟子に、はやく一人で飯の喰えるだけの力をつけてやりたいと常々念じていたからであった。

『ちよつと、出かけるぞ』

『あ。お出かけですか』

『ム……ちよつと』

そのくせ、清磨自身は、もうここ一月の余も、鍛冶小屋に坐らなかつた。

鍛てないのだ。心がそこに向かないのである。

『喰う為という目的^{めあて}だけで、あれ程、仕事に夢中になれる人間は仕合わせだなあ』

外へ出てから^{つぶや}呟いた。そして、仕事の熱を求めするように、

(誰の為に、おれは鍛とう)

と、心で思った。

飯の為、酒の為、ただ生きる為だけで——彼は刀は鍛てなかつた。なぜならば、彼が刀を鍛つ仕事は、自分で生命を削るのも同じだと——それが分つて居るからである。

(母が生きていたら……)

と、その度に思う。思つても効^かかない事と知りながら胸が傷む。

そして、空虚^{うつろ}な心は、酒の魅惑へ、つい囚われた。

——その日も、夜まで飲み歩いて、殆ど、性もなく、木枯らしの中を落葉と一緒に^{ひょう}飄

ひよう
々 と吹かれながら、平河天神から麴町の灯をあてに来ると、

『やいつ、田舎鍛冶っ』

『ろうがいや
勞咳病み。待てっ』

誰か分らないが五、六名はいた。——挨拶がないとか、生意気だとか、悪口を喚きながら、清磨を、袋叩きと集つて来たのである。獲物の棒切れか何かが、二つ三つ、清磨の瘦せた背骨や、腰に中たつた。

不意ではあるし、泥酔していたので、清磨は、大勢の中へ仆れた。——然し、仰向けざまに蹠けながら抜打ちに薙いだ刀に、手応えはあつた。次の瞬間、意気地なく、わつと大勢が退いたので、その背の一つへ、追い打ちに、もう一太刀、浴びせかけたのも覚えてい

る。
わらわらと逃げて行つた登音の後は、又、ひっそりと静かになつた。坂の途中の閉まつている屋敷門の下で、彼は、その儘、血刀を持った儘、いい気もちで、眠つてしまつた。血臭いので、暫くすると、犬が吠えかかつた。それに、眼をさまして、彼は又歩き出したが、寒さにだいぶ酔いも醒めかけていた。坂の上まで来ると、夜鷹蕎麦の灯が見える。よろよろと屋台の中へ首を入れた。

『おいつ、蕎麦』

『へい』

『——じゃあなかった。まず先に、一本かな』

『旦那』

『なんだ』

『血がついて居ますぜ、お手に』

『ほう、成程。……手桶に水はねえか』

『御座いますが……はてな？』

『何が、はてなだ？』

凝^{じつ}と、蕎麦屋は、顔を見ている。清磨も何気なく蕎麦^{うり}売の顔を見つめた。
見たような男なのだ。

先でも、いつ迄も眼^{かがや}を耀かしていた。

四

『ウム。思い出した。——もしや旦那は、信州の山浦という刀鍛冶の弟じゃないかな』

『お。……蕎麦屋さん、お前とは、松代で会った事があるな』

『ある』

『長州の浪士と云ったか、藩士と云ったか、忘れたが、たしか名は金子重輔』

『よく、覚えている。いかにも、自分は金子重輔だが。……おぬしは、江戸へ出ていたのか』

『夜蕎麦売とは、変った渡世とせいをしているな。おれも、彼のあ日ひが、生涯わがの岐れ道まちになつて、とうとう、つまらない刀鍛冶きりめいに成っている』

『そうか。して刀の切銘きりめいは』

『山浦清磨』

『えつ、近頃、四谷正宗といわれる清磨とは、おぬしのことか』

『面目ない。そんな大したもんじゃねえ。……ああ、あんまり意外な人に出会ったので、酒がさめちまった』

『飲もう！……。こつちへ這入らないか。火もあるぞ』

『お前さん、まだ、本職の蕎麦売じゃないな』

『元より、これは仮の姿だ』

『ふうム……。この寒空に、粹すいきょう狂きやうな、何でこんな真似をしているんだ』

『粹狂？ ……そう見えるか。江戸の人間には、そうも見えようなあ。おぬしのように、明日の日本が、何どうなるかも知らず、飲んで、嚙たわ言吐ことほぎいて、虫けらみたいに、生きている奴が大概だから』

『何。……何だと』

『まあ飲め』

屋台の裏で、空箱を腰掛けに、行火あんかを挟んで二人は対むかい合っていたが、清麿は、重輔の今の一言に、さつと、冴えた顔から、鋭い眼をすえた。

五

彼が怒ったので、金子重輔は、

『では、虫むし虻けらと云った理わけを聞かしてやろう』

と、肱ひじを張って云った。

今、日本は、開闢かいびやく以来いらいの危機にかかっている。

海の外を見る。支那を見る。

英、仏、露、など諸外国の虎視眈眈こしたんたんと日本の隙間を窺うかがっていることを考えてみたら慄りつぜ然んとしようが。

だのに、江戸はこの頽廢たいはいぶりだ。幕府は無能だ。——誰が、神国のこの危機を救うか。われわれはもう、腐すえた幕府などはとうに見捨てている。

この時、これは神示だ。

われわれが、仰おほぎまいらす御方は、一天の大君しかない。だのに、その御所の御衰微ごすいびの様ようといったら何どうか。

口にするのも勿体ない、涙がこぼれて云えない。

『……貴様、知っておるか』

金子重輔は、涕てい涙なみして暫く、口を緘つぐんでしまった。

彼は又、熱心に言葉をつづけ、日本の国体から説き起して、二千余年の治乱を語り、幕府の悪政による朝廷の御式微がどんなに下々の想像もつかない程であるかを話して、

『ただ、幸には、幕府は腐つても、この国体はまだ腐っていないかった。今のうちに、尊そのん

王の大義を建て、外夷を討つ計を立てなかつたら、この日本は、支那と同じ轍をふむほかない。——日本に生れながら日本を知らず、醉生夢死に世を送ってしまう奴らを、虫虻と云つたのは、おれの間違いだらうか』

と、一気に云い終つて、清麿の顔を見つめた。

『……………』

清麿は、身を凍らせて、凝と、聞き澄ましていた。唇の色まで霜風にふかれて蒼かつた。——然し、彼の性来多感の血は、少年のように、皮膚の下に沸り立っていた。

『ありがとう』

慇懃に、頭を下げ、礼をいうと、重輔はかえつて、擲揄されたかと思つて、

『何だ、それは』

『慎んで、お礼を云います。もし今夜、貴方に会わなかつたら、私は、虫けらで生涯を終つたかも知れなかつた』

『才……解つてくれたのか』

『解らずに何うしましょう、胆にこたえました。——同時に、劍工として、自分がこれから鍛える心的もつきましたが、まだ一つ、疑いがある』

『疑い？ ……それはわしの云った事にか』

『いや、自分の仕事に就て』

『どういう事か』

『時勢は、移つてゆく。武器もどしどし進んでゆく。兵術も洋式になる。——そうした世の中では三尺に足りない刀など、今に、進歩した砲術の前では、針ほどな役にも立たなくなるのではないでしょうか』

『……ウウム』と、重輔も、それは深く考え込んで居たが、やが聴て、

『そうだ、それは佐久間象山先生に聞け。象山先生のほかに、その答を明確に云つてくれる人はあるまい』

『あいにくと、てまえはまだ、信州へは行かれません』

『何、松代まで行く必要はない。先年から藩公つに従いて、象山先生は江戸へ出ていらつしやる』

『えつ、江戸に御在府でございますか』

『内密だが、自分も密ひそかに、出入しておるから、日を見て、一度先生のお宅で会おう。猶な、いろいろと話しもあるから』

と、他日を約して、その夜は別れた。

火華氷柱

一

西洋真伝兵学砲術教授所

表門に、看板がかけてあった。

木挽町五丁目こびぎの佐久間象山の江戸屋敷である。約束の日に、清麿はそこへ行った。

金子重輔は、先に来ていた。その日は、いつか見た姿とは変って、どこから見ても志士らしい侍の服装になっていた。

『十数年前、信州の小島村で、お目にかかった山浦清麿でございます』
彼の挨拶を聞くまでもなく、重輔から話を聞いていたので、象山は、

『よく来たのう』

と、当時を追懐ついかいして、今の刀匠清磨を懐なつかしげに見た。

そして、清磨から、例の疑いを、問い出さないうちに、象山から云った。

『——聞けばそちは、将来、西洋兵術や砲術が進めば進むほど、日本刀は不要になりはせぬかという迷いを抱いているそうだが、余人の凡ほん工こうなら知らず、山浦清磨ともある者が、そんなことでは困る』

と、前提して、

『剣けんは、武士のたましいだ。武士は国体の衛士えしだ。この国土のある限り武士道はある。武士のある限り、武士のたましいたる剣もなくてはならぬ。——わけても日本刀は、洋刀とは違う。それを鍛つ者の精神、それを帯びる者の精神、二つながら違う。もし、その精神が錆さびびたり、その精神が失われるようなことがあつたら、日本は亡ぶ日だ。——だから日本の亡ぶ日まで、日本刀は朽くちさせてはならぬ。不要になるなどとは、以てのほかな夢想で、鍛て、もつと、その信念を以つて鍛て』

西洋学者といわれた象山の口からそう云われたのである。清磨は、もう迷わなかった。

(劍工！ ああ、よくもおれは、この天職を掴み取った。そうだ、日本の劍工でなければ

いけない)

ここへ、来る前の彼と、帰ってゆく時の彼とは、姿は同じでも、既にちがっていた。

礼をのべて、帰る際に、象山へ、

『お座右へ置くには足りませぬが、いずれ一口、その心をもって鍛ったものを持って参りまする』

と約して別れた。

二

——その戻り道。

木挽橋こびきばしの上で、ちらと、摺れちがった年増としまの茶屋女風の女が、

『——あらつ?』

と、往來の人の間から、軽い驚き声を投げた。

振り顧ふりかえって、清麿はハツとした。別所で別れたお寿々すずだった。

橋向うまで馳けて、その辻つじ駕へ飛び乗った。

行く先も云わずに乗ったので、駕屋は、

『旦那、急げ急げって、何処まで行くんです』

『柳橋辺りでいい』

つい、云ってしまつた。

いつも飲む家の門かどである。——どう自分の天職に自覚を持って、酒だけは、だめだと思つた。酒とは、終生、縁が切れそうな自信もない。

『ああ、何日か会うものだなあ』

お寿々を頭に描きながら、その日の帰りも、深酔いして、家へ戻ると、夕闇の畳の上へ、ごろりと転うたたね寝をしてしまつた。

と、勝手の方で、

『清人きよひとさん。……たいへんです、ちよつと来て』

お次の声でした。

清人は、仕事場から出て行つた。

『なんだ、大変て』

『左門町に、固山宗次かたやまむねつぐという、弟子の沢山さわやまいる刀鍛冶がいるでしょう』

『箆棒め、弟子が大勢居たって、宗次の刀なんぞ、鈍刀番附の横綱だ』

『そんなことを告げに来たんじゃありません。その宗次の弟子が、何処かで、家のお師匠様に、斬られたことがあるんですつてね』

『へエ。……聞かねえが』

『その事だの、遠い前の事だの、種々と、遺恨が積っているから、清麿のやつを斬ってしまわなければならぬ。今夜は斬り込むのだと、ゴロ浪人まで入れて、刈豆店の居酒屋で居ますとき。いつもここへ来る時、買物に寄る、煮豆屋のおかみさんが教えてくれたんです。……清人さん、お師匠様は』

『うたた寝していら』

『まあ……。何うしましょう』

『何うしよう』

と、清人と一緒に顛へ上つて、そつと、清麿の寝顔をのぞきに来た。

清麿は、眼をあいていた。そして、清人から聞かないうちに、

『抛つとけ抛つとけ。だが、いくら蚊みたいな奴でも、沢山来ちやあ、うるさいから、玄関の両側に、薪をうんと積んで、蚊いぶしの代りに焚火をしておけ。——いいか、そして

門の戸も、裏の木戸も、残らず開けっ放しにしておくんだ』

『師匠……。お酔いになっているんでしよう』

『ばか。酔っているか居ないか、これを見ろ』

抱いて寝ていた自分の一刀を、寝たまま抜いて、ぱつと夕闇を横に薙いだ。

『——あッ、あぶないっ』

清人は、台所へ飛んで来た。

お次は、御家人ごけにんの娘だけに、そう聞くと、

『仰っしゃるのように、して置きましょう』

と、家の中も、表も裏も、皆開け放して、二、三カ所に、大袈裟げさな焚火をしておいた。

『どうなるんだろ？』

と、清人は、生きた心地もない。むしろ落着いているお次を力に、息をころして隠れていた。

やがて、固かた山宗次やまの弟子やゴロ浪人は、獲物とらを持って、襲よせて来たが、がらん——と開け放してある家の中と、どこどか燃え旺さかっている火を見ると、

『……おやつ？』

『はてな？』

立ち竦すくんで、垣の外を、やや暫く、こそこそしていたが、そのうちに町廻りが来たので、わつと逃げ散つてしまった。

三

清人は、飛び出して、手を打った。

『わははは。ざまあ見やがれ。師匠、もう逃げちまいましたぜ』

お次は、手桶の水を、火にかけて消していた。

むつくり起き上つて、清麿は、

『折角、今夜は夜半よなかから、仕事にかかろうと寝ているのに、うるせえ奴だな』

『師匠、今、燈火あかりをつけて持って来ますが、ひとつ鑑みて戴いたかれましようか』

『なんだ、鑑てくれとは』

『お蔭様で、山田浅右衛門から注文された刀が、やっと仕上りましたんで』

『ほう……』と、ニツコリして、

『出来たか。どれ見せる』

清磨が欣んでくれたので、清人は、行燈を片手に、白鞆に仕立てたばかりのひとふり一口を持つて来て、差出した。

清磨は、鞆を払つて、凝と、眉をよせていたが、ずかっと起ち上るなり、

『だめだ。こんな物！』

闕しきいの隙すきに突つ込んで、ヘシ曲げてしまうと、がらりと、庭先へ投げ捨ててしまった。

『あつ……師匠つ』

清人が、泣き声を出すと、

『何だ、惜おしそうに。あんな物なら鍛くわか冶かじでも鍛つ。小手先でもヘシ曲がるような餠あめ細工を、清磨の弟子の刀といわれては、おれの名折れだ』

『……へ。……へい。……濟みません』

『刀とは、こうして作るものだ。仕事場へ来いっ』

もう、そう云つた時の顔つきから、清磨の面おもてには、ここ久しく出なかつた、仕事への凄まじい情熱——あの夜叉やしやにも似た血相みなぎが漲もたっていた。

四

その夜から師も、弟子も、厠かわやにゆく時のほかは、鍛冶小屋を離れなかった。夜半も、鞆ふいごうなが唸り、鉄敷かなしきの響きが洩れ、冬の月へ、凍いて返った。幾日も、幾夜もつづいた。

帰るにも帰られず——お次は母屋おもやにいて、そこへ、握り飯を運んだり、表へ来る借金取りの云い訳に、手をついていたりした。

『もしえ？ ……ちよつと伺いますが』

と、小粋こいきな中年増が、門を覗のぞいて云った。

『こちらは、山浦清磨さんのお住居すまいですつてね』

『ええ、そうです』

『あなたは、御新造さんですかえ？』

女の眼は、妙に鋭く燃えているので、お次はすこし脅おびえながら、

『いいえ……』と、答えると、

『ホホホホ。そうでしょうねえ。此の家に、他ほかに御新造様などがいてたまるもんじやない

からね。どこに居るんです環たまきさんは』

『環さん？ ……そんなお方は』

『いえさ、今の清麿さんの昔名前さ。わたしやあ、あの人に、用があるんです。ちよつと、そう云つて下さいよ』

『今は、お取次ぎができません』

『どうしてさ』

『叱られます』

『いいから、そう云つてお出でなさい。別べつしよ所のお寿すず々が来ましたといえは、何を打ツちやつても、飛んで出て来なけれやあならない義理合ぎりあいがあるんだから』

『…でも、それは、御無理でございましょう。会わないと仰おほつしやっている時は、誰どなた方が、何なにといおうが』

『会わせないというのかえ。——あ、あれは、鍛冶小屋の音だね。お前さんなんぞの取次ぎは待たないからいい。自分で勝手に会つて来るよ』

家の横へ廻つて、裏へ行こうとするので、

『あつ、いけません。——もしつ』

お次が、裸足はだしで飛び降りて、彼女の前を遮さえぎった。

『なにさ？ 出酒張でしやばって』

お寿々は、お次を突き飛ばして、小走りに駆け込んで行った。見ると、露地ろじつづきの裏のすぐ彼方むこうに、注連繩しめなわの張り廻してある黒い鍛冶小屋の入口がすぐあった。

仕事の権化となっている清磨には、彼女が、小屋へ這入って来たのも知らずにいた。お寿々は彼の姿をそこに見ると、くわつとして、いきなり、

『お前さん！ ……。よくもわたしを、お忘れだね。いえき。よくも、私の姿を見ながら、何日か木挽橋では、逃げましたね』

と、清磨の胸ぐらをつかんだ。

清磨は、驚くよりも、猶、仕事のうつつから醒さめないで、

『え。 ……誰だ。おまえは』

『誰とは何さ』

甲かんだかく、お寿々は、泣き声をふくんで呶どな鳴った。

『シラを切るのもいい程におし。別所のお寿々を忘れて、お前さんは済むのかえ』

『あ……おう……お寿々か』

『さ！ 話があるから、出ておいで』

『うるさいっ』

『何だつて！』

『何もくそもない。注連縄が見えないかつ。ここは山浦清磨の鍛冶小屋だぞ』

『知ってるから来たんだよ。もうお前なんぞに、未練はないが、く、く、くやしくつて堪らないから』

『出ろつ、出てゆけ。不浄だ。小屋が穢れる』

『穢れるだつて。よくもそんな口が』

『ええいつ、出ないか。撲るぞつ』

『若い娘なぞ、引ッ張りこんで、私を、不浄なんて、口惜しい、離すものか……』

『うぬ、出て失せぬか』

『出て行つて、たまるものか』

『よしっ』

清磨は、力まかせに、突き出した。それでもまだ、お寿々は、躍気とかかって来るので、小脇に引つ抱えると、裏木戸から、寺の寺内へ抛り出した。

『清人！ 小屋を一度掃き出して、塩を塩をつ』

五

自分の鍛^うつ劍に、自分が抱いた新しい信念を吹きこんで、その一^{ひと}口^{ふり}を、彼はまず、佐久間象山へ贈ろうと、発心したのであった。

彼は、その一刀を。

又、弟子の清人は、鍛^うち直^{ただ}しの一^{ひと}腰^{こし}を。

師弟二人が、共に、対^{むか}い合^あって、あだかも鍛^うち競^きべをするかのように、不眠不休といつてもいい精進を、十数日もつづけていた。

ふと、対^{むか}い合^あっている弟子の鑪^{やすり}の音が止むと、

『清人ッ』

『……はア』

『眠いのかっ』

『い、いえ』

『なんだその眼は。てめえの作る刀の未来も分るぞ、眼からして、もう赤鱗だ。――
水を浴びて来いっ』

『へいっ』

清人は、深夜の井戸端へ駈け出して、氷の棘が生えている釣瓶縄を見ながら、真ッ裸になるのだった。

『おれも浴びる』

と、清麿も来て、仕事着をかなぐり捨てた。

肋骨の出ている細い肉体に、冬の風がふきつけた。清人は、吃驚して、

『師匠、と、とんでもない。……滅茶だ、そんなお体で』

『ばかあ云え。おれの体には、注連縄が張つてある』

『後生です……止めておくんなさい。神様へ向つてなさる行ならば私が、師匠の分も浴びておきますから』

『心配するな。実あ、てめえを叱りながら、おれも眠気に襲われて来たのだ』

笑つて、彼も一緒に、釣瓶の水をぎつと浴びた。

鑢かけして、相造りが終ると、焼入れにかかった。弟子に教えることは懇切だつ

た。だが、清人は清人だけの才分しかなかった。何か、気に触れた時である。清麿は、彼の脳天から、雷鳴かみなりのように呶鳴った。

『止めちまえッ！ 刀鍛冶はっ』

そして、いきなり蹴飛ばして、研桶とわけの水を頭からぶツかけた。

外へ、転がり出した上、研ぐその水に、濡れ鼠になった清人は、もうほんとに、刀鍛冶は止めてしまおうと思つたのか——冬陽ひなたの日向へ立って、男泣きに泣いていた。

張板はりいたを立てて、檻樓ぼろを洗い張りしていたお次は、気の毒そうに、そつと寄つて。

『どうしたの……どうなすつたの……』

『かまわないでくれ。……おらあ、唯、自分が鈍に生れたのが恨めしい』

『又、叱られたんでしよう。ここが、怵えどころですよ。何んな職業しごとだって、修業の道は辛いものと極つています』

その時、玄関の方で、

『頼もう。——山田浅右衛門の使者とかけでござるが』

と、厳めしい口いかのきき方をした使者の訪れが聞えて来た。

催促である。

お次が、出て行つて、聞くと、

『註文の刀は、ぜひ年内に欲しいのでござる。——という次第は、鍛ち下ろしを戴いた翌日——いつも朝の未明みめいでござるが、罪人の死体をお上より申しうけ、新刀あらみだめ試しをいたしておきたいと主人が仰つしやる。——それには、初春はるにかかつては、何かと、困り申すので』

口上は、裏の方まで、よく聞えて来た。

清人は、威勢よく、涙の顔をこすつて、仕事場へ這入つて行つた。

『師匠。……すみません。これから、自分の愚鈍やすりへも鑢なをかけて、猶な一生懸命にやりますから、どうか、もつと叱つて下さいまし』

六

年暮くれに押迫つた極月の二十七日頃。

小塚つ原は、霜しもはしら柱で真つ白だった。然し、空は暗く、夜はまだ、明けるにだいぶ間まがあつた。

千住の宿場遊廓から飛んで来た帰り駕の提灯らしいのが、どう道を勘ちがいたか、刑場の原へぶらぶら迷いこんで来る様子——

『おや、馬鹿野郎め、狐にでも化かされやがったんじやねえか』

番小屋にいた非人の二人が、のそのそ出て行ってみると、空駕はすぐ町の方へ引返して、後の原つばに、酒くさい男が一人、ぼんやり立っていた。

『御浪人、ここは通り道じやねえぜ』

教えてやると、素裕一枚の瘦せた男は、知っている——と頷いて、小判を一枚、懐中から出し、

『少いが、これは手土産だ。その代りに頼みがある。明日の早朝、ここで山田浅右衛門が、胴試しにかけける罪人の死骸を、朝までおれに貸してくれないか』

と、云うのである。非人は、不審顔して、

『悪戯されちやあ困るが』

と、金も欲しそうな顔すると、

『はははは。悪戯するどこか、抱いて寝るだけのことだ』

——こいつは、酔っぱらっている。非人は顔を見合せてくすくす笑った。金は取って置

かなければ損と当然に考えた。

『その筵むしろ小屋の中に入っている死骸がそうだ。外へ持ち出しちゃいけねえぞ』

指さすと、酔いどれ浪人は、這い込んで行つた。非人は、腹を抱えて笑つた。程経てから又、そつと外から覗き込んで、

『あれ……ほんとに、死骸を抱いて寝ちまやがったぞ。酒くせの悪いやつもあるものだな』と、呆れ顔を見あわせた。

一方は、

『起せ起せ』と、云つたが、

『まだ、空は暗い。浅右衛門様のお駕が見えてから、つま掴み出しやあいだろう。一両の宿賃だ。もうちつと、寝かしておいてやれ』

と、放つておいた。

辺りが白みかけると、山田浅右衛門と二、三名が来て、形かたの如く、死骸を土壇どたんにすえた。ゆうべの酔っぱらい浪人は、いつのまにか、消えていた。浅右衛門は自身、鍛うち下ろしたばかりの新刀——清麿の弟子齋藤清人が鍛ひとふりえた一口を試して、

『存外、斬れる』

と、評しながら、間もなく帰って行った。

正月の二日早々。

清人の所へ、山田浅右衛門の宅から、斬味きれあじを賞揚した礼状一通と、酒肴代しゅこうだいが届いた。

清人は、その手紙を持って、年始に歩いた。何処へ行つても、それが自慢だった。——
ところがそれから一月も経つてから、彼は、お次つぎから囁ささやかれた。

『清人さん、あまり自慢し散らさない方がよう御座いますよ。お師匠様なまげのお情なさけも知らないで』

『ばかいい。あの刀は、鋼はがね卸おろしから研とぎ上あげまで、おれの手で鍛えたのだ』

『それはそうでしょうが、浅右衛門の手にかかつて、斬れ味のよかつた理わけを知っていますか』

『おれの腕が確かだからよ』

『そうではないでしょう。極月の二十七日の晩、お師匠様はお留守でしたる』

『遊びに出かけて、翌日の昼間、頭の重い顔して、帰つておいでなすつた。酒のことは、いくら云つても無駄だから、もう御意見は云わない事にした』

『何を云っているんです。……あの晩、お師匠様は、清人さんの刀が見事斬れるか斬れないか、それを心配する余り、家へ帰らなかつたんですよ』

『えっ、神信心にでも行つて下すつたのか』

『いいえ。お帰りになつてから、私が、着物を畳たたんで上げると、何ともいえない嫌な匂いがするので——オヤ、死人臭しびとい——と迂うつかり云つたら、お師匠様が、きつと私を見て、黙っている、と恐い眼をしてこう仰うつしやつたんですよ』

『ど、どう云つたんだ』

『——浅右衛門の胴試しに会つて、もし、清人の刀が、斬れなかつたら、あいつの一生涯は、浮かばれない事になるから、小塚つ原の非人に金をくれて、試しにかける死骸を借り、明け方まで抱いて寝て、死骸の肌を温めておいたんですよ』

『……えっ、師匠が、死骸を抱いて寝たんだって』

『わたしは、初めて聞きましたが、凍っている死骸を斬ると、人肌に温ぬくもっている死骸を斬るのでは、まるで斬れ味がちがうんですってね』

『……………』

清人は涙もろい。お次からそう聞くうちに、もう両腕に顔を埋めて、彼女の方へ背中を

向け、しゃくり上げて泣いているのだった。

『……まあ、又泣いてしまつて。清人さん、お師匠様の心が分つたら、泣かないでも、それを、胆に銘じておいて、いつか御恩返しをすればいいじゃありませんか。……お師匠様も、きょうは、去年からかかつて、一心に鍛ち上げたお刀を持って、佐久間先生とやらのお屋敷へお出かけだし……さ、泣かないですよ。ね、清人さん、鶯うぐいすが笑っています』

裏庭の梅花うめはもう綻ほころびかけていた。

不滅くにとまの国瓊

一

長州なまり訛なまりの侍、薩摩なま弁なまの侍、柳河藩なながしの某なながし、荘内藩なながしの誰——と、木挽町うぐいすの西洋学者の門を出入する志士風の者はかなり頻ひん繁ばんであつた。

清麿も、その一人だった。

彼が贈った一作は、いつも、象山の座右に置かれていた。

そこで、幾多の志士と、清麿は知り合った。若い志士たちの理想や議論をだまっけて聞いていた。

——が、彼は同時に、世間の如才しよさいない、刀鍛冶のように、金次第のいわゆる御差刀料おさしりようなどは作れなくなつてしまった。

貧乏は、彼を追いつめてくる。

お次は、何という宿縁しゆくえんか、妻ともなく、その貧苦たたかと闘つて、

(大馬鹿者)

と叔父から云われ、勘当の身となつてしまった。

彼女は、それを、むしろ幸として、

『生涯でも、清麿さんの仕事場へ、研水とみずを汲んであげれば、わたしはそれで本望です』
と、清人に洩らした。

清人は、嘆息をもらして、

『もう、お故郷くくにの方に、義理立てもないのだろうが、師匠は、若いお次さんに、胸やまいの病を

うつしたくないからだぜ。女房にしないからといって、それを恨んじや違うぜ』

『知らない』

部屋へ走りこんで、彼女はひとりで泣いているらしかった。

『きようは、お次さんの泣く番か』

清人が、そんな冗談を云っていると、窪田清音すがねの仲間ちゆうげんが使に來た。——お次は又、はつと、顔色をかえた。

(もしや何か? 自分の事で)

と、恟々どきどきしていたが、そうではなかつた。何か用事があるから、清麿が帰つて來たら、すぐ屋敷へ來るやうにという口上なのであつた。

二

ずつと、不沙汰なのである。江戸へ來てからの恩を、忘れ果てたわけではない。

武器講ことう百刀会の刀はまだ四半分も鍛うち上げていない。どう自身でも心を責めても出來ないのである。しかも、前取りした金はどうの昔に費つかつてしまっている。

鬨しぎの高い思いを越えて、清麿は、恩師の前に、面目ない顔を伏せた。

『どうした。ひどく痩せたじゃないか』

清音に、そう云われる程、彼は辛い気がした。

『——そう改まるな。今日呼んだのはほかじゃないが、武器講の一件だ。弱ったのう。彼あ方うち此方こちから、矢の催促はまずよいとして、余り長びくので、近頃は、そちに対して、種々な取沙汰だ』

『御恩を仇で返したような始末、何とも、お詫びのいたしようが御座いません』

『わしの立場か。……ムム、それもわかっておるじやろう。——だが、もつと案じられるのは、そちの立場だ。近頃、そちはよく、勤王方の志士たちと、往来しておるそうだな』

清麿は、ぎくとした。恩師清音は、幕臣である。

『——で、近頃そちも、わざと足を遠くしておるなと察しては居ったが、武器講のお世話人、加藤宅馬殿を初め、多くは皆、幕府方の人々じや。なお、始末が悪いわい』

『おことばでござりますが、清麿は刀鍛冶でございます。天子の民、日本の一鍛冶と生れたことを、果報と思っておりますが、何処までも、てまえの使命は刀を鍛つことと、分を存じておりますから、勤王方の志士たちと、往来ゆききはいたしておりますも、幕府を倒す運

動などに、組しているわけではございません。それだけは……』

『待て——』清音は、抑えて、

『その善悪を、糺すのではない。唯、お前に告げておくのは、わしの見るところ、この儘では、お前の身辺が危いことだ。そちの本心は、どうあろうと、幕吏ぼくりが眼をつけて、縛り上げようとすれば、いくらでも罪悪の名目をつけるぞ』

『はい』

『ここ暫く、江戸から足を脱ぬけ。ほとぼりが冷めたら又帰って来い』

『でも、武器講の御迷惑をかけ放しでは……』

『偽りを申すな。今のそちの精神として、幕府方の侍共の腰ものの刀が鍛てるはずはない。江戸に居たとて、出来るものか』

『……』

『金の方も、後の始末も、清音が身に負って致してつかわす。何処など、当分、遠国へ行つておれ』

『……はい。死後までも、御恩のほど、忘れませぬ』

『そう感じてくれたら、一刀でもよい。大君おおきみを護り奉るに足るような銘刀を鍛て。——

この窪田清音は、徳川譜代ふだいの臣じや。今にも、事こそあれば、喩たとえ勤王方の兵であろうと、この老骨に、伝来の一腰横たえて、戦うやも知れぬ』
六十も越えて、眉もすでに白い人の、その眸ひとみの奥に、清麿は初めて、真の徳川武士というものを見た心地がした。

清麿が、江戸から、忽然と姿を消してしまったのは、それから数日の後だった。

窪田清音は、来訪の客を見るたびに、

『不届ふじとき至極な奴でござる。——見つけ次第に、お報らせ下さい。槍鞆やりぎや払って、一突きに、成敗してくれまする』

と、非常な怒り方であった。

客は皆、

『武器講の金を蓄え置き、逐ちくてん電したものでござろう』

と、云った。清音も一緒に、

『あやつ、平素から、金には汚い奴で』

と、罵った。

今になって——と、陰で清音を非難する者もあったが、始末は悉しっかい皆、清音がつけたの

で、日が経つうちに、人々も、問題にしなくなってしまうた。

三

世は、愈 騒がしい。

漸く、江戸の民衆にも、時勢の動乱が、眼にも、耳にも、解つて来たのである。

弘化、嘉永と、年号の短く変わるのまでが、あわただ 慌しい感じを世に与えた。

どこに隠れていたのか、山浦清磨は六、七年ぶり、ぶらりと、江戸へ戻つて来た。

(家があるかしら?)

と、すら思いながら、北伊賀町へ来てみると、清人は仕事場にいた。お次は、米の磨とぎみ水を流していた。

『よく鍛冶小屋を護つていてくれた。だが、二人とも、変つたなあ』

『お師匠様こそ』

三名は、お互いに、茫然として、何から話そうという事も、俄にわかに思い出せなかった。

清磨は、今日まで、何処にいたとも語らなかつた。——だが、彼の死後に現われた刀の

切銘きりめいには、「長州萩城ニ於テ作ル」としたものと「村田清風先生ノ為ニ鍛ツ」と切った作刀がかなり見られるので、長州に潜伏せんぷくしていた事は、想像に難くない。

江戸に帰った後も、彼の生活は変らなかつた。又、信念も変らなかつた。

象山はあれから後、一度帰国したが、次の出府には、清麿も又、江戸に戻っていたので、木挽町に行くことも、前と変らない。

金子重輔と一緒に、吉田松陰しょういんと会つたのも、木挽町のその書齋であつた。松陰とは、その時が初めてではない。清麿が長州にいるあいだ、幾度か、その人の風には接していた。自分よりはずつと年下であつたが、清麿には、忘れ得ない人のひとりであつた。

その松陰は、江戸からすぐ又、長崎へ向つて立つと聞いたので、清麿は、自作の小柄こづか一本を餞別せんべつにと持つて、翌日、象山の家を訪うと、

『惜おしかつたの、もう今朝立つた』

というので、彼は落胆して、帰りかけた。

すると、象山は、

『実は……』と、彼に松陰の旅行の大事を打明けて、

『わしも、松陰が立つた後から、彼の大望を激励げきれいする意味で、一詩を書いたが、もう間

にあわぬものと、ここに巻いて淋しく思っていた所だ。そちが心をこめた餞別もあるなら、今から急げば追いつけぬこともない。何とか、手渡したいものじゃが』

と、云う事なので、清麿は、

『承知しました。先生の詩を御覧になったら、猶更、感激なさるでしょう。お話をうかがえば、これが生死のお別れになるかも知れぬ門出かどで、ぜひお渡しいたしましょう』

と、引受けて、東海道を追いかけてゆき、自分の気持と、象山の依頼とを果した。

彼を待つ大きな運命は、その日駈けた道にあつた。すぐ翌年——それは安政元年となつた三月——吉田松陰と金子重輔のふたりは、下田港からペルリの軍艦へ近づいて、暗夜に乗り、密航を企てたことが失敗して、幕府の手に捕えられた。

送別の詩が、禍わざわいして、象山も国元松代で幽閉ゆうへいの身となつた。

当然、清麿にも、疑いがかかった。然し、小柄に彼の切銘はなかつた。唯、象山と彼との間に誰か、連絡をとつた者があるらしいという程度であつた。

その儘、夏になつても、沙汰はなかつた。秋になつても、呼出しは来なかつた。

——だが、彼が絶えず、何ものかに、備えている覚悟は、お次にも、清人にも、薄々わかつた。

清人は、お次にそつと、囁いた。

『師匠は、この頃、いつでも懐ふところ中に、画家の川辺さんから貰って来た緑青ろくしやうのつつみを隠して持っているようだぜ……』

『えつ、緑青を……？』

彼女もまだ、そこまで切迫した清麿の気持とは思っていなかったらしく、そう聞くと、真つ蒼になつて、唇をふるわせた。

四

夜もすがら、木の葉雨がわらわらと、破れ廂やびさしを打つので、時折、眼がさめる。

しいんと壁が寒い。——十一月の中旬である。

寝床とこについてから間もなく、

とんとんとん——

表の門を叩く者がある。

清麿は、天井へ眼をひらいた。手はすぐ蒲団の下の刀へ行つた。

『——はい』

茶の間に寝ていたお次が答えてしまったのである。……しまった！　と思ったがもう間にあわない。

急いで、帯をしめて、お次は出て行った様子である。遂に来る日が来たのだ。ぜひがない。

覚悟は、日常にある。

万一捕つかまって、白洲しろすに曳ひかれ、拷問ごうもんの苦痛と、幕吏から恥辱をうけるのは堪え難い。

——いや堪え難いのみでなく、生身なまみの体だ、その苦痛に克かちきれなくなつて、この口から、万一にも、勤王方の不利なこと一点でも洩まらしたら愧死きししても足りないことだ。

又、もう一つ彼の惧おそれたことは、大恩のある窪田清音の身に、禍わざわいのかかる事だつた。それを避けるには、自分の「死」以外に安全な道はない。

清磨は、すぐ、台所へ走つた。

手桶ひしゃくの柄杓ひしゃくをつかみ、氷を割つて、水を口に含んだ。

常に持つている小さい紙包みを、顔の上に逆さにして、緑青の粉を、一口に仰飲あおつた。そして又、急いで、水桶から水を掬すくい、ぐいと飲みほした。青い粉末がすこし溶けて、

唇を燐のように光らした。

『いつでも来い!』

大刀を横たえると、彼は、死へ向つて、こう叫んだ。

——その時、表へ出て行つたお次が、あれつと、悲鳴をあげて、ばたばたと、逃げ惑うような蹙音を立てた。

五

『逃げることはないよつ。——もしつ、お次さん、お次さんてば』

彼女の開けた門から、途端に、そう云つて駈けこんで来たのは、お寿々であつた。

台所の露地から、走つて出た清麿は、うぬと喚いて、出会いがしらに、刃を抜き浴びせた。

『——あツ、た、環さん』

その絶叫は、半死へ心の行つていた清麿を、愕然とさせた。お寿々とは、夢にも思つていなかつたのである。——環さん、遠い昔の名を呼ばれたのも、彼の胸をふかく衝いた。

た。

『……だめ、だめ。……わたしを殺しては。……わたしは、報らせに来てあげたのだ。今夜、わたしの奉公しているお茶屋へ飲みに来た岡つ引から、ちらと聞いたので』

『お寿々』

清麿はぺたつと、側へ坐つた。

『お、お前とは、知らなかつた。……お、お寿々……』

霜に俯つ伏した朱まみれた顔は、もう応えがないのだつた。

よろよると、立つと、彼方の闇に、凍つたように恟すくんでいたお次は、

『お師匠様ツ……』

と、彼の胸へ、駈け寄るなり、縋すがりついて、わつと泣いた。

『き、き、来ました。……とうとう、おわかれの日が』

『捕手とりてか！』

きつと、振向くと、垣根越しに、裏隣りの寺の寺内を、チラチラと駈ける提灯の光りが、透すいてみえる。

近所の屋根の上にも。そして、物の気配けはいにも。ぎゅつと、肌を緊めてくるような一瞬が、

体じゆうをそそけさせた。

笠だの、合羽かっぱだの、草鞋わらじだの、鼻紙はなだの、一纏まとめひつ抱えて、清人も、家の中から飛び出して来た。

今夜に限って、彼は、泣きもしないし、うろろもしていなかった。

『師匠しせうつ、はやく、この合羽かぶを被かぶつて、草鞋わらじを穿はいて――。あ、あたしの田舎へ、逃げましょう。お次さんも連れて』

『清人か』

『そ、そうです』

『それはおめえの旅仕度たびじどにしてくれ。……ああ、長い間、苦勞くろうばかりさせて、済すまなかつたなあ』

『そ、そんな事。……さ、お次さんも、泣いている場合ばいじゃねえぞ。はやく、師匠しせうにこれを』

『いや、お次には、平常ふだんに話してある。決して、おれに義理立ぎりだててなどするなよ。二人で逃げろ、きれいな仲の三人だ。生きてゆく先で、よく心と心で話してみるがいい、……お次には、おれから云つてある事がある』

みりつと、寺の藪やぶで、生木なまきの踏み折れるような響なまききがした。清磨は、二人を門の外へ突き出して、内から棒をかつてしまった。

六

大地が号泣するように、門の外に、それからも、暫く嗚咽おえつの聲がしていた。

清磨は、よろぼいながら、雪隠せっちんの横の縁側から這いあがった。

御先祖と、神棚のある部屋まで、這って行こうとするらしい。

だが、縁ろくしゅう 青の毒素は、もう血の中を駆けまわっていた。がばつと、縁に、首を垂れてしまった。

——一瞬。

清磨は、あらゆる苦痛が、体じゅうから解ほぐれるような心地した。然し、意識はその体を、もう動かそうともしない。

板の間へくツつけている彼の顔は、にやりと微笑したようだった。耳には遠く千曲川の水音でも聞えているらしい。きれいな小禽ことりの音すらありありとそこらにする。

(……いいよ、いいよ。何も、謝まることはない。そなたは、わしの子ではないか) ぼつと、虹の環わのような中に、母の顔が見えた。昔ながらの温いお管すげの顔である。

(不孝? ……いいえ、おまえが独りで苦んでいるんだよ。わたしは、おまえに乳をあげた土ですよ。咲いた花が悪かったら、わたしという土が悪かったことになる。だのに、そなたは、天子様の赤子せきしとして、恥はじない華はなを持ったじゃないか)

兄が側で、頷うなづいている。嬉々として、梅作が小さい掌てをひらいている、——淋しげではあるが、お咲の顔も、自分をゆるすかのような眸めで、凝じっと見ている。

萬象、あらゆる物が、その霧の中では生きている。見たこともない白髪はくの老人などが、飄ひょうとして、横よこぎつてゆく。——御先祖様かも知れない。と清麿の、意識ともつかない不思議な意識がふと思う。

恩人の柘植嘉兵衛つげかへえと、窪田清音すかねとが、破顔はしている。それでいいのだと云っているように。

——直胤、直胤、直胤。

と、彼の霧の意識はさがしたが、どこにも見えない。虫けらのように見えない。 ぱりぱりッ!

これは、現実の物音である。

垣を破つて、捕手は、雪崩れこんで来た。

『あつ、戸が開いている！ 風を喰らつて、逃げたぞ』

清磨の俯ツ伏しているすぐ側で、こう呶鳴りながら、捕手たちは、彼を見出さずに、家の周りを、暴風雨のように駆け繞り初めた。

その声に、ふたたび此の世の肉体へ、飛んで返つて来た意識を持って、はッと、首を擡げた山浦清磨は、両手を、懸命に縁の板へついて、わずかに、戸の開いている方へ、身にしじり廻した。

——そこから、彼方遙か、京都の方を望んで。御所の常盤木を胸に思つて。

『……………』

十一月の夜、霜より冴えた夜、星は一つ一つ、燦としていた。

恭しく頭を下げるなり、同時に、山浦清磨の鍛つた刀は、山浦清磨の喉を突き刺して、かりの世の肉体を、ふたたび永遠の溶鉱炉へと送り戻した。

〔作者附記〕 山浦清麿の遺作は今日猶、不朽な銘刀として遺された物少くありませんが、彼の事歴は、死後湮滅いんめつされた為、殆ど記録も稀れで、作者の推理と、想像に拠った所寡少としません。又、脚色上仮想人物の点出も云う迄もなく、主人公が近世の人物であり、現存縁故者もあるべく思われるので、敢て、お断りいたしておく次第です。猶、熱心なる山浦清麿研究家藤代義雄氏、岩崎航介氏などの作者に寄せられた御好意をも、併せて多謝いたします。きます。

（昭和十三年九月）

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・㊦ 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「講談倶楽部 臨時増刊」大日本雄弁会講談社

1938（昭和13）年9月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山浦清麿

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>